

救世軍大旗





# 救世軍 戦争記

これは世界に於る救世軍の事情及び日本に於る救世軍の現状等を記したる書物です



英國倫敦市クインビクトリヤ町百〇一番  
救世軍万国本營 大將 ウヰリヤム、ブー  
日本國東京市芝區芝口二丁目三番地  
救世軍日本々營 大佐 ヘンリー、ブレード



GENERAL BOOTH.



スーヅ将大





Mrs. GENERAL BOOTH.



大將アース夫人



Mr. BRAMWELL BOOTH  
Chief of the Staff.



スーブルエツムラブ長總謀参



COMMISSIONER HOWARD.



フルロハ將少官長務外



Mrs. COLONEL BULLARD.



人 夫 同

COLONEL BULLARD.



佐 大 ー ラ ヲ



GROUP OF OFFICERS.



生 補 候 び 及 官 士



# 救世軍戦争記目録

第壹章	救世軍とは何か	一
第二章	救世軍の起原	五
第三章	世界に於る救世軍	十
第四章	社会事業	十五
第五章	大將ブース	十八
第六章	日本の開戦及び現況	二十六
第七章	救世軍の集會	三十
第八章	改心者及び兵士	三十三
第九章	出獄人救濟所	四十八
第十章	融業婦救濟所及び自由廢業	五十四
第十一章	水夫及び商人館	八十一



第十二章	開辦及び出版物	八十四
第十三章	救世軍の賛助員	九十
第十四章	克己週間	九十三
第十五章	救世軍成效の秘訣	九十五

# 救世軍戦争記

## 世界に於る救世軍及び日本に於る救世軍の事を紀す

### 第一章 救世軍とは何か

廣く世界各國を旅行し、又は平生西洋の新聞雜誌を讀んで居る人々は、救世軍が今日宗教上、社會上の大運動であることや、又は其事業、目的等のことに就て見聞する所あり、過る百年間世界に起つたる様々の運動の中でも、救世軍が取わけ目醒しい進歩を著したる團體であることなど、よく御承知の事と思ふ。然り乍ら然ら云ふ特別なる便宜を有ぬ人々に於ては、一向未だ救世軍の何たることを知らず、偶々近來の娼妓自由廢業問題などに關係して、頻りに其名前を聞くに付、一昧救世軍とは何であらう、何と云ふ性質のものであらうかなど、疑ふて居らるゝ向も少くない様に見

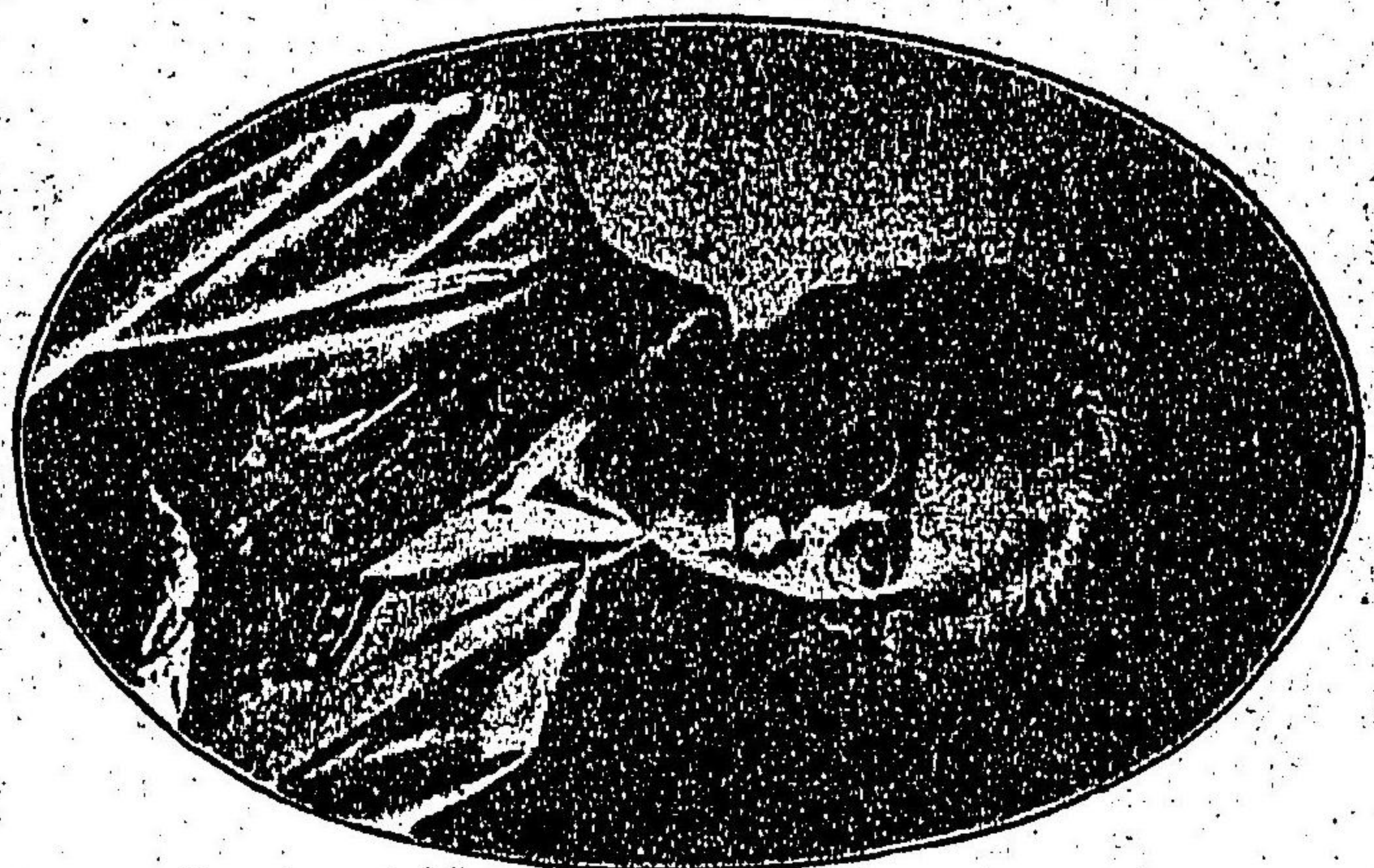


救世軍は如何に救世軍を如何に

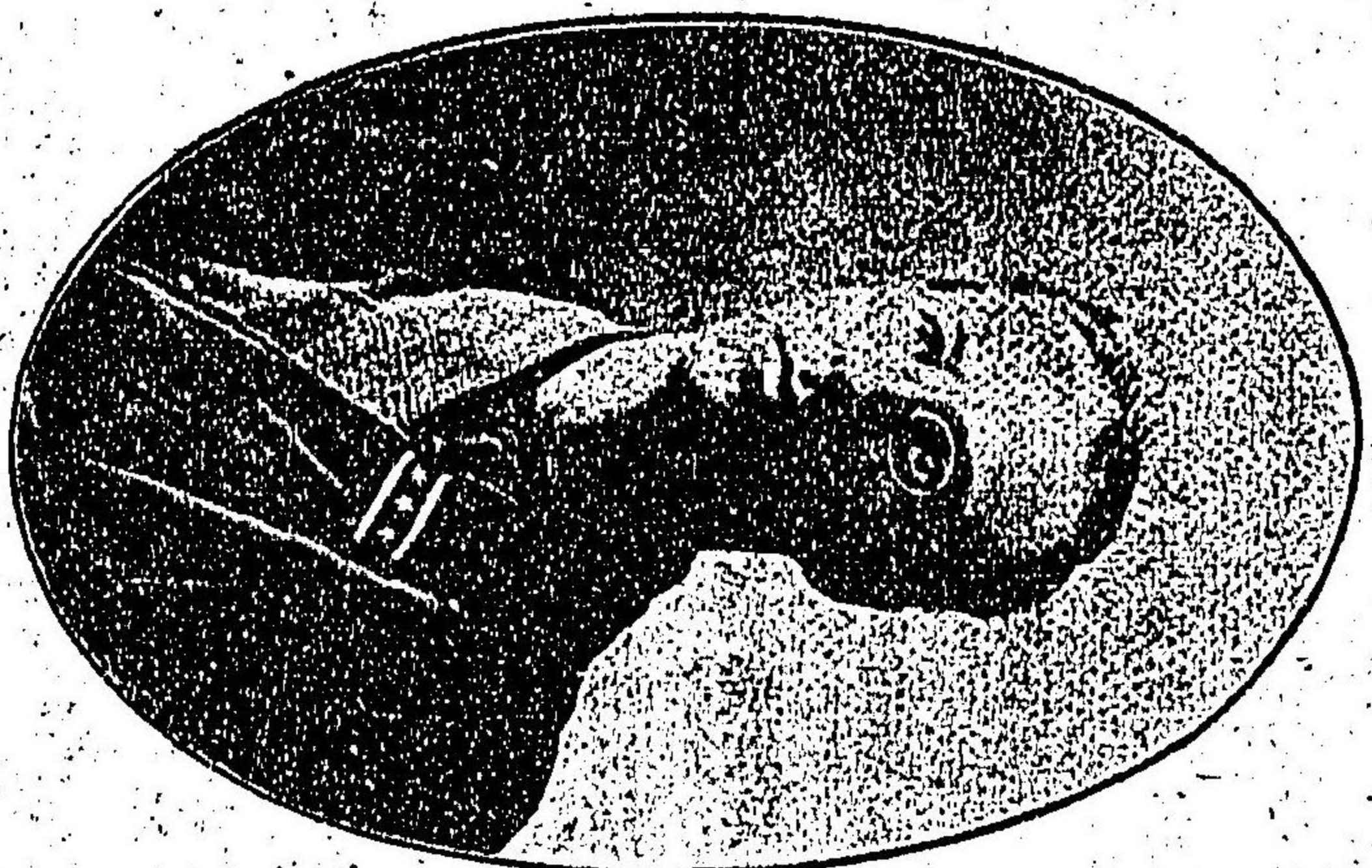
二

受る。其に就て世間の取沙汰は種々様々でふりますれ共、今一々其をこゝに掲げて居る暇が有り。唯一つ倫敦のバーナル、ガゼットと云ふ名高い新聞が、先頃救世軍の起原、性質、事業等に就て録したる一節を翻譯し、諸君の御参考に供へ度と思ふ。

今から三十六年前に、一人の年若い傳道師が深く思索を凝す所あるが如く、倫敦のマイル、エンド、ウエーストに立ち、其あたりの町の模様を眺めて居ます。見れば向ふの焼酎屋には、れ得意の無頼漢が所狭き迄に群り集ひ、然うかと思へば無宿の乞食が、角の下水板の上をうろくど致して居る。疲れ果たる婦人が内職の仕事を風呂敷に包んで、お菜代にも足らぬ手間賃を受取る爲、重たい足を工場に運ぶ向ふからは亦、貧に窶れて纏纏を纏へる若い妻君が頭に物も冠らずに、もつれた髪を風に吹かせて出て参り、其後からは酒に酔ふて、足元さへも覺束さぬ男がどぼくと現はれて來ます。年若い傳道師は熟々此る惘然なる下層の状態を視て、屹度心に思ひ定むる所がふりました。「よし〜余は此後如何様にかして、是非其此貧苦に憐む同胞兄弟を救はねばなりません。救世軍は即ち此一傳道師の大決心から湧出



Mrs. MAJOR DUCE.



MAJOR DUCE.

人夫同

佐少スーエダ

三



第一章 救世軍とは何か

たる團練であり升。此團練が今日社會の一大勢力であるとは、誰か之を拒む者が  
 わらう。其發達は頗る迅速にして、よく一代の間に全世界に及んだことであり升。今  
 や北はダウソン市、氷洲より、南はダチン、ケーブタウンに至り、東は横濱、マ  
 ニラより、西はホノル、に至る迄、救世軍人の働いて居ない所はない。錫蘭島に食  
 物の寄附を求めて歩く世話役があれば、ニューハウンドランドの寂しい海邊に、漁  
 夫を教化して居る士官があり升。或者はホワイトチャペルの貧民街に住んで、其所  
 の悪漢共を感化し、或者は伯林のピーヤホールに醉客を説諭し、或者は又フィンラ  
 ンドの雪と氷の間に、基督の福音を宣べ傳へて居ます。其經費は年毎に一千萬圓を  
 超へ、月給も手當もなしに、自給で働く義勇兵の數は萬を以て數ふべく、樂隊員許  
 でも既に一萬四千人に達して居ると云ふ。而して此る多くの人々が、皆唯其同胞兄  
 弟を救ふことを目的に、力を盡して居ると云ふは、さても驚くべき事實ではありませ  
 ぬか。思ふに數百年の昔、彼の温厚の君子フランシスが、克己の十字軍を傳播した  
 る以來、救世軍の如き運動は、未だ嘗て世界に現はれなかつたことであり升。

尙此から章を逐ふて、段々に書する所を讀めば、何人も救世軍とは果して如何ある  
 ものかと云とに付、明白なる判断をなし得らるゝに相違ふりませぬ。

第二章 救世軍の起原

この國にも、特別に貧しく且つ墮落して、道德の事などには一切意を留めず、相集  
 つて放蕩や犯罪の巢窟を造つて居る、下層の社會がムリ升。此る人民の集つたる所  
 を、英語でスラムと申し、倫敦のホワイトチャペルあたりは、其本場と見なされて居  
 り升。

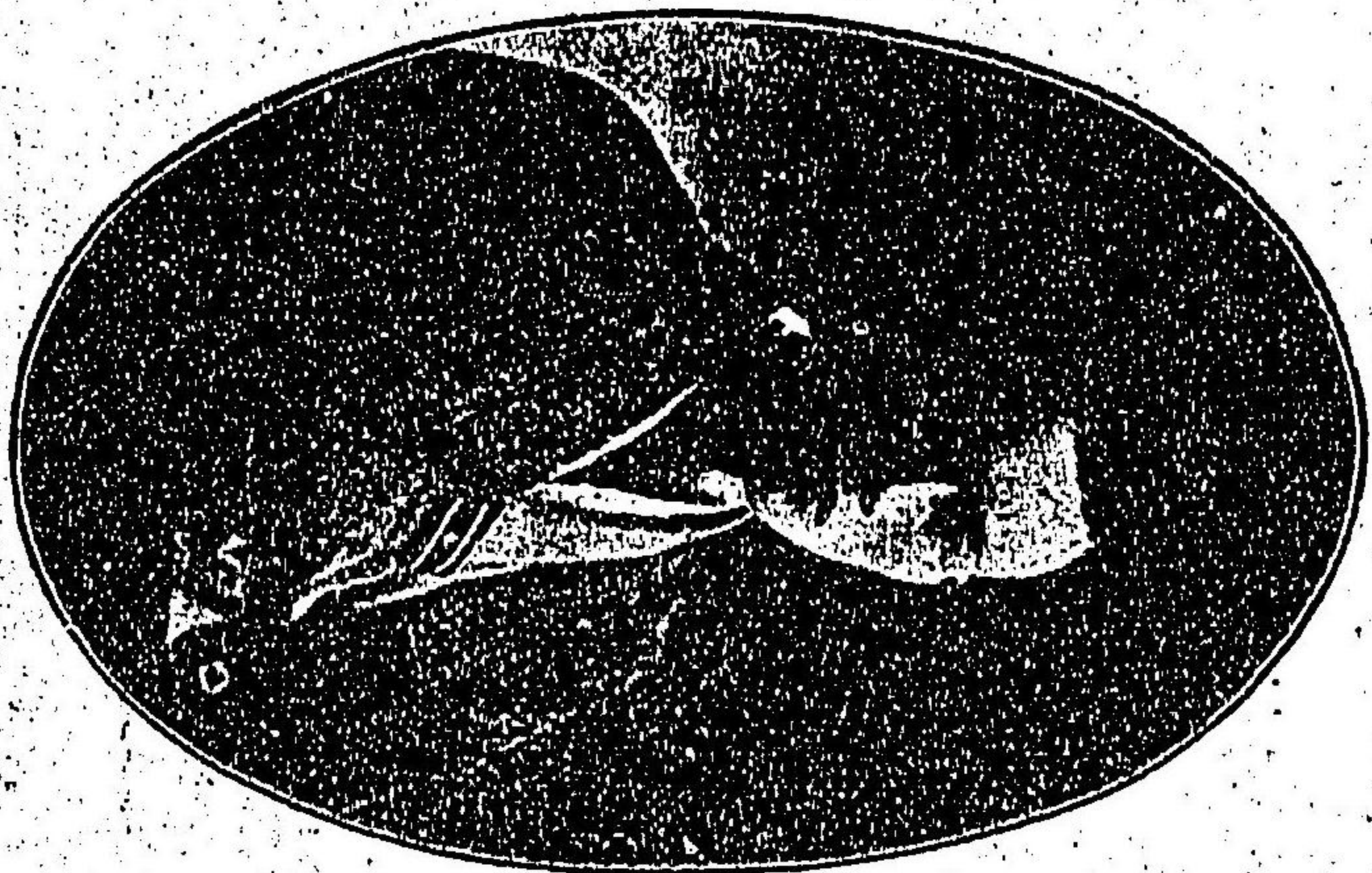
救世軍の開祖にして又其總督たる大將ブースは、此う云ふ不信心にして罪惡に汚れた  
 る、貧民街の有様を視、深く其心を痛め思ふ様「是は實に全國に散て居る數十百萬  
 の、最も惘然ある同胞兄弟の標本であり升。而して今日教會や、慈善團體の力は、未  
 だ一向此る社會に行届いて居ないことを見れば、自分は如何ある辛苦困苦を嘗めても、  
 必らずや此が救濟の爲に盡力せねばなりませぬと。是の大將ブースが當年の覺悟でム

第二章 救世軍の起原



りました。西暦千八百六十五年、即ち我が慶應元年は大將が、其一片の至誠に驅られ、聖靈の導に従ふて、倫敦市中、殊に極貧極悪の人々が住ふ町の辻に立ち、基督の福音を傳へ初めたる年であり升。爾來劇場其他人民の近き易い場所に於て集會を催ふし、同時に普通の教會が用ひ兼ねたる進歩的の手段を採用ひ、多くの人々を覺醒して之を悔改に導き、又其改心者の中から、一緒に事業をなすべき教役者をも養成する。あと、追々働きを突進めましたが、其結果は僅々三十六年後の今日に於て、早くも英吉利國中は愚か、世界各国にまでも、其手を伸すほどの大運動とはなつたことであり升。而して今日迄救世軍の手に因て救はれ、改造されたる無賴漢、犯罪人、博徒、醜業婦などの数は、同じ時代に他の諸教會で救はれたる合計よりも、尙數が多いと認められて居り升。然らば其他の種類の人々に對し、救世軍は如何なる働きを爲て居るか。と申すに、是亦多くの人々が其良心を喚びさまされ、迷ひの夢より起て、活ける基督に立歸り居ることである。

救世軍の世に現はれたる以來、市井の暴徒に迫害せられたる例は、極めて夥しいこと



中 將 三 枝



山 田 中 將 夫人

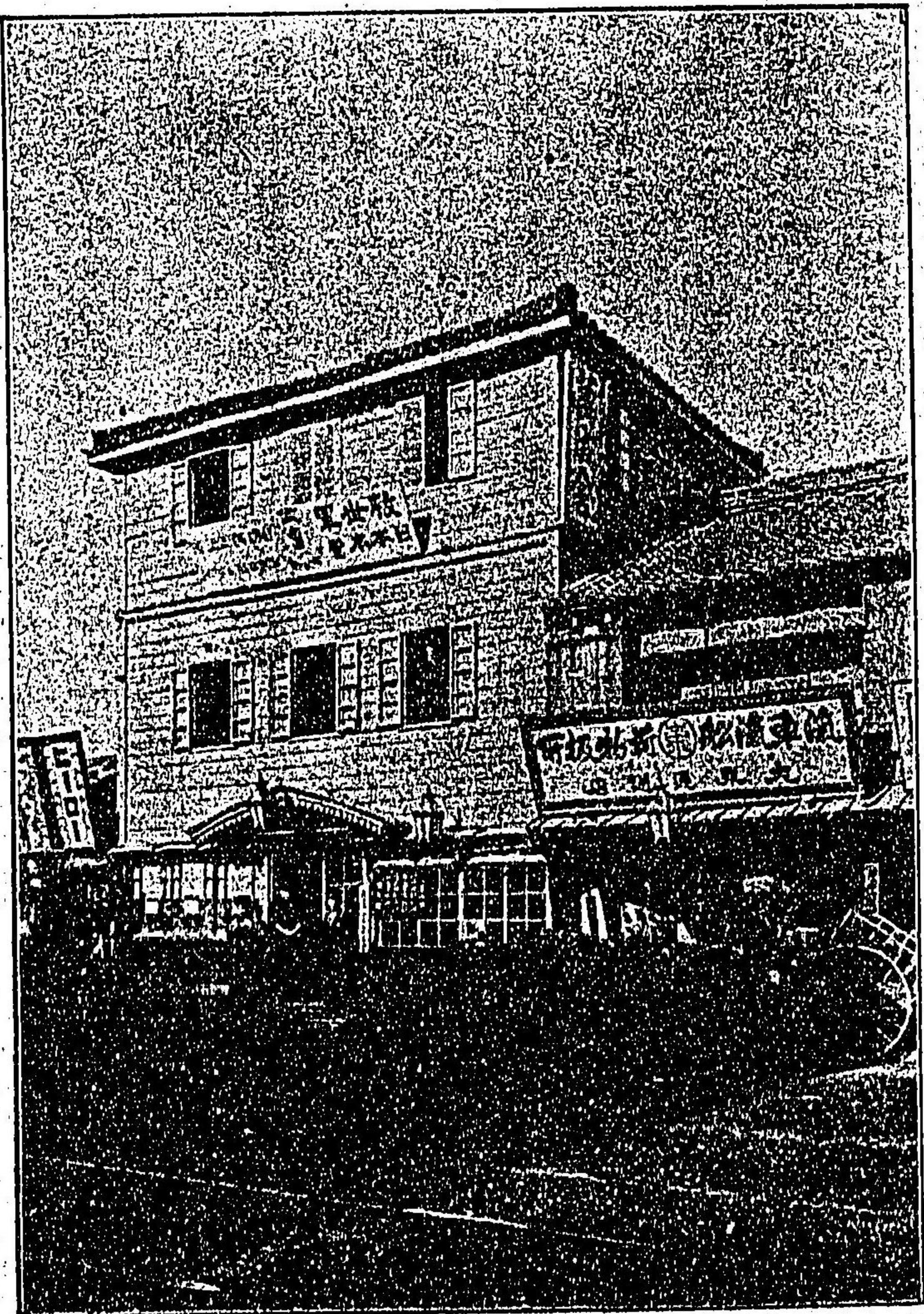
ADJUTANT YAMAMOTO.

Mrs. ADJUTANT YAMAMOTO.



であり升。其のみならず或時は政府から誤解せられ、色々難儀を致したこともあつて「救世軍人は断頭臺に上る他、あらゆる患難辛苦を嘗め盡したと稱へられて居ます。最初の間は事業の進歩が寧ろ遅い方であつた。創業より十三年目の時には、傳道地の數が五十、教役者が八十八人あり、而して數千人の信者が之を助けて働いて居ました。此年従前の「基督教傳道會」と云ふ名義を更へて「救世軍」と稱へ、武官の稱號を用ひ、軍隊組織を採用することゝなつた。而して救世軍の最も著るしい進歩は、實に此時から後のことであり升。我明治十三年に當り、救世軍は始めて英吉利以外の天地に、其士官を派遣致しました。最初に手を着たるは亞米利加合衆國で、其翌年には更に歐洲、佛蘭西に開戦致しました。明治十五年には印度に軍勢を遣りましたが、此年救世軍士官の數は千〇十九人、小隊は四百四十箇ふりました。我明治二十三年は大將ブースが最愛の妻、救世軍の母、ブース夫人が歿せられたる年であり升。同年大將は有名なる著述「最暗黒の英國及び其救濟法」を出版し、其書物の筋に隨ふて、救世軍の社會事業部を創められました。其以來職に外れたる者は職

NATIONAL HEADQUARTERS  
TOKYO JAPAN.



(京東在) 營々本日軍世救



第三章 世界に於る救世軍

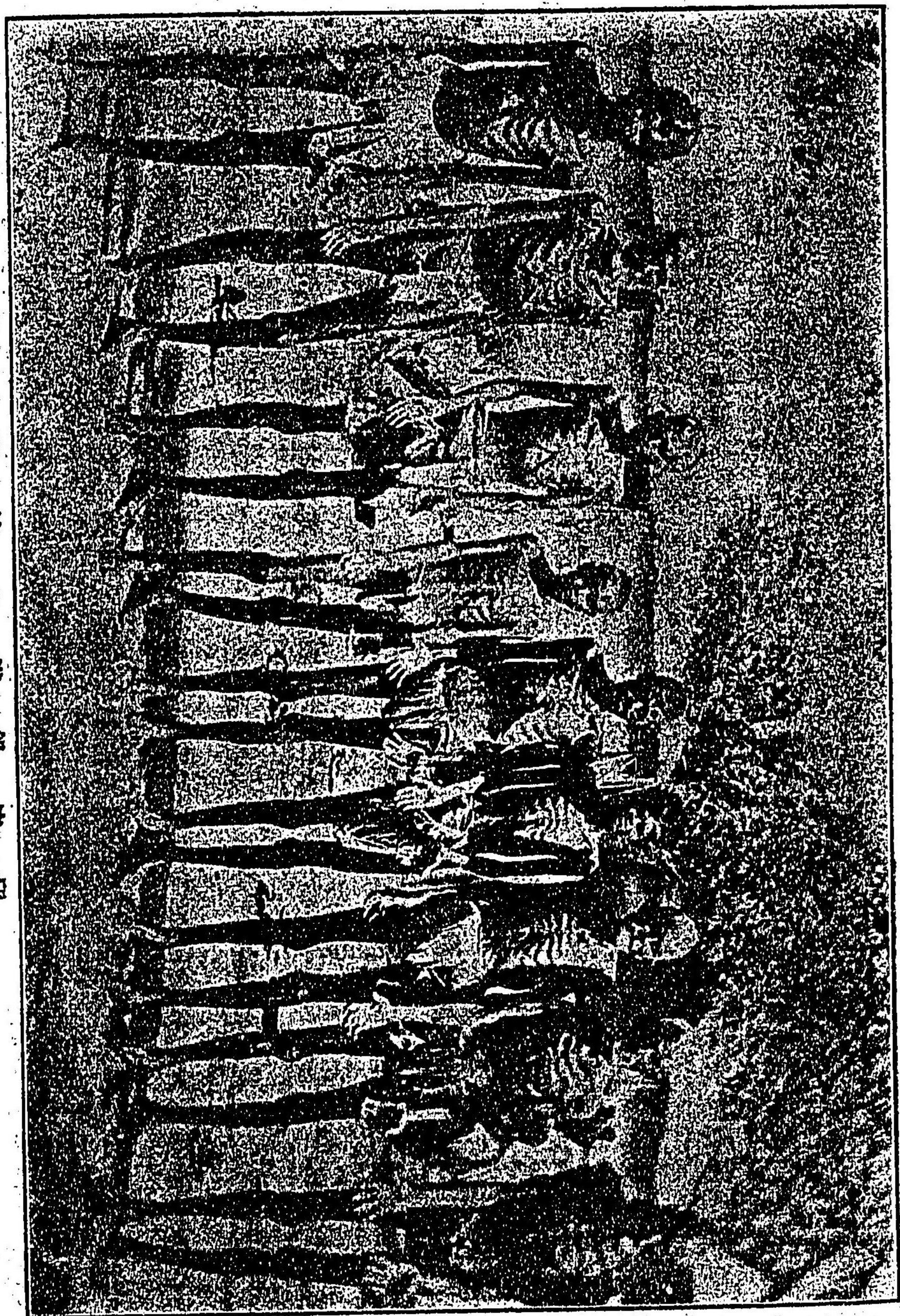
を得、乏しき者は衣食に有附き、無宿者は其隠家を得、失踪人は其在所を見出され、出獄人、醜業婦は正業に復することを得るまで、様々の目醒ましい働が、こもこも舉る様になりました。此年の募士官の数は九千九百二十一人、小隊の数は合計二千九百二十八箇に達しました。

救世軍が其後の進歩成長は又格別なものである。士官兵士の数は日にくに加はり、其感化は普く世界に及んで居ます。

第三章 世界に於る救世軍

大將ブースが始めてマイル、エンド、ウエストに立て、唯一人路傍演説を致し、其あたりの貧民、窮民、無頼漢等を、根本的に濟度する、其運動に取かゝられてより、僅か三十六年の間に、此く迄其働が手廣くあつたこと云ふことは、殆んど夢の様に覺ゆるる事實で、世界の宗教歴史に、例のきい發達でムリ升。今試みに救世軍が其血と火の軍旗を翻へして居る、重なる國々の名稱を舉れば、英吉利、北米合衆國、加奈太、

INDIAN FAMINE SUFFERERS.



狀 慘 の 飢 飢 度 印



オーストラリア、佛蘭西、獨逸、瑞典、和蘭、諾威、フィンランド、丁抹、以太利、南亞非利加、印度、錫蘭、氷洲、爪哇、南亞米利加、西印度、布哇、及び我日本等であり。尙左に掲ぐる統計表を見れば、救世軍の世界に於ける位置を、大概想像すること出来る。

明治三十三年後期に於る救世軍の統計表

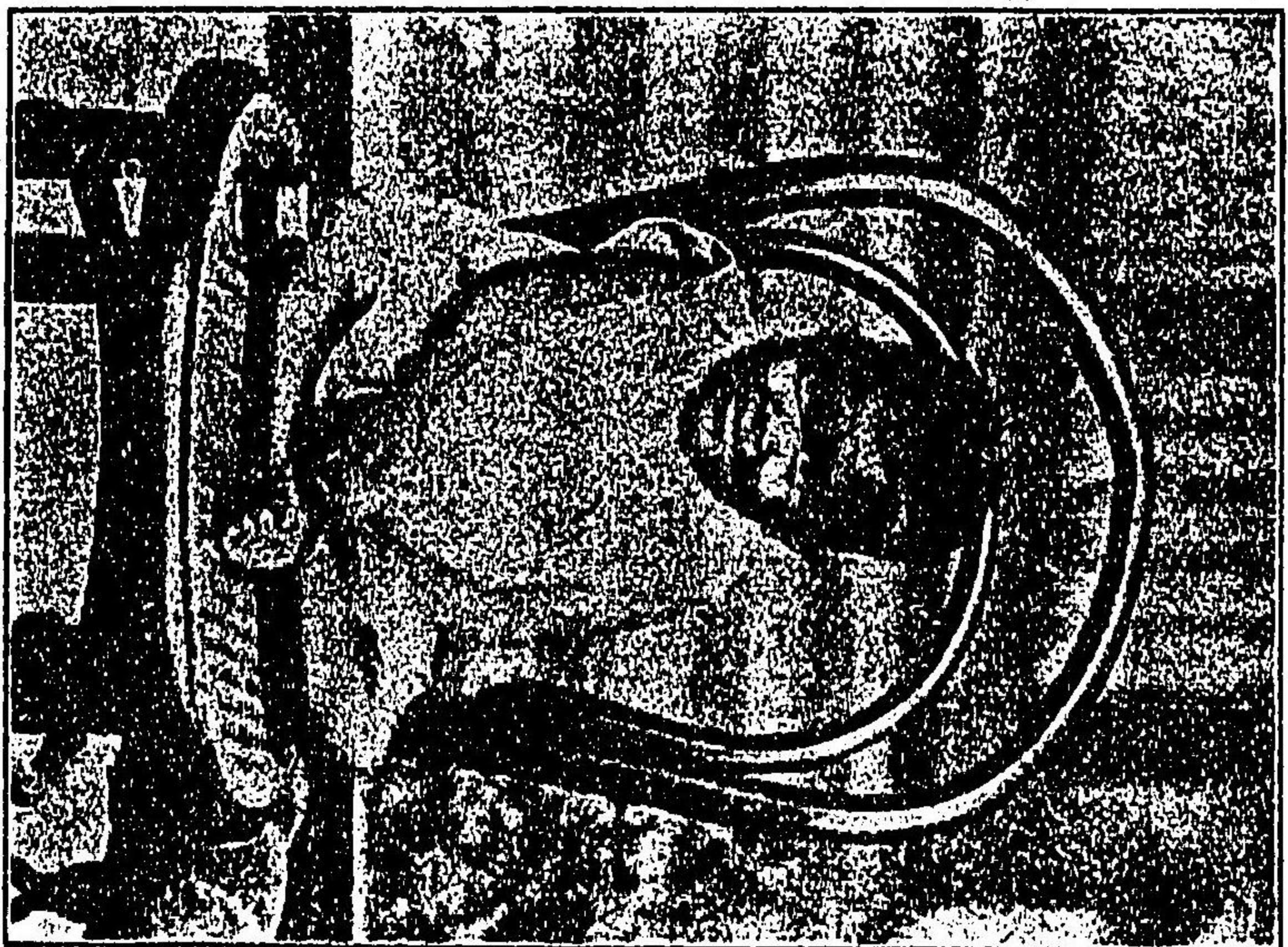
- 一、小隊及び分隊の數 七千二百九十六箇
  - 一、士官の數 一万四千八百二十三人
  - 一、下士官の數 三萬八千八百七十一人
  - 一、樂隊員の數 一万五千八百五十人
  - 一、新聞雜誌(廿一ヶ國の語にて) 五十五種
  - 一、同毎號の發行部數 九十八萬千五百六十八部
  - 一、出獄人救濟所、醜業婦救濟所其他の社會事業部 五百八十三箇
- 救世軍が何より大切なる務として、一生懸命に盡して居るは、人の靈魂を救ふ事業で

ある。然り乍ら時と場合に因つては、神様の御榮の爲、又告る所なき同胞の爲に、様々の慈善事業をも營みます。即ち病人の爲に病院及び看護婦養成所を設け、貧民の爲に銀行を立て、海陸軍人の爲に兵士及び水夫館を造り、島嶼に散て在る人々を訪ひ慰むる爲に小舟を備へ、難破船を救ふ爲に助船を調へて居る如きは、其實例であり升。昨年印度の大饑饉に際しては、二十万圓の金を集め、穀物分配所を開いて、飢に迫つて居る多くの人々を救ひ、南亞非利加の戦争には士官を英兵、ボア兵兩方の陣中に送り、軍人を慰め救へ、其病人怪我人を介抱致させました。又昨年の夏米國で、熱病に悩む多くの貧民が、氷を買兼て難澁して居る時には、特に廉價氷賣捌所を救世軍中に設て其急場を救ひ、近頃ガルブストンの天災に、二万人からの死人があつたる節には、直ぐに多人數の救助員を派遣した様な次第であり升。尙此類の働は數多あれ共、今一々之を言盡すことが出来ませぬ。

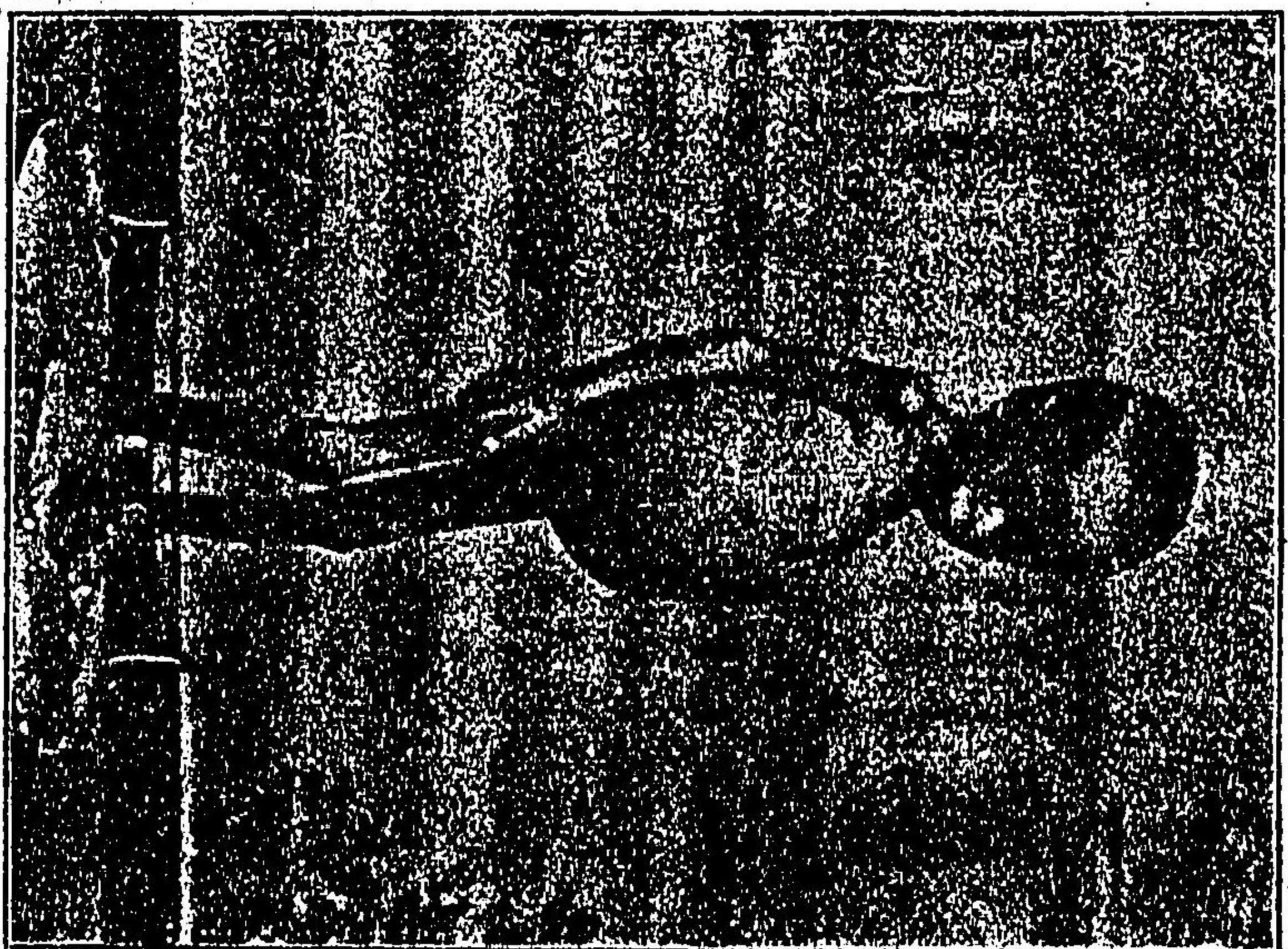
然り乍ら人々の靈魂を救ふことは救世軍の本職である。其他の事業は皆此根本から生へ出たる枝葉に過ぬ故、我輩は平生有ゆる手段を盡し、殊に靈魂を救ふことを目的



INDIAN FAMINE SUFFERERS.  
THREE MONTHS AFER  
CHILD AS RECEIVED BY US.



月ヶ三後るたれら取引に軍世救の児に同



兒童饑の病くる取引に軍世救

に其戦争を營む者であり升。

### 第四章 社會事業

參謀總長ブルムメル、ブーヌの語に、「主耶穌は極悪人を相手に其業を爲し給ふた。耶穌は猶太の最も腐敗したる社會、最も墮落したる人々の間に働き、之に由て其救の力を証據なし給ひました。此は其貴とい教訓、及び十字架の御憐憫と相並んで、主が神様より來り給ふたことを現はす、最も大切なる事實であり升云々。救世軍の大將は耶穌基督の御精神をうけ紹ぎ、社會の最下層に在る人々を迄も、漏さず濟度し度いと云ふ大願を以て起ちましたが、其に就ての管に神様の御教を、言辞で説いて聽す許でなく、差當り其人々に必要なる肉躰上の手當を施し、之を其悪い境遇から救ふた後であらば、切角廣大ある福音の恩恵も、仲々此う云ふ社會には及ぼし難いことを認めました。即ち長らく監獄に居た爲に、放免になつても引取人のない人々の爲には、之を引取る可き家を備へねばならず、これまで醜業を營んだる婦人には、之を感化する場所



第四章 社会事業

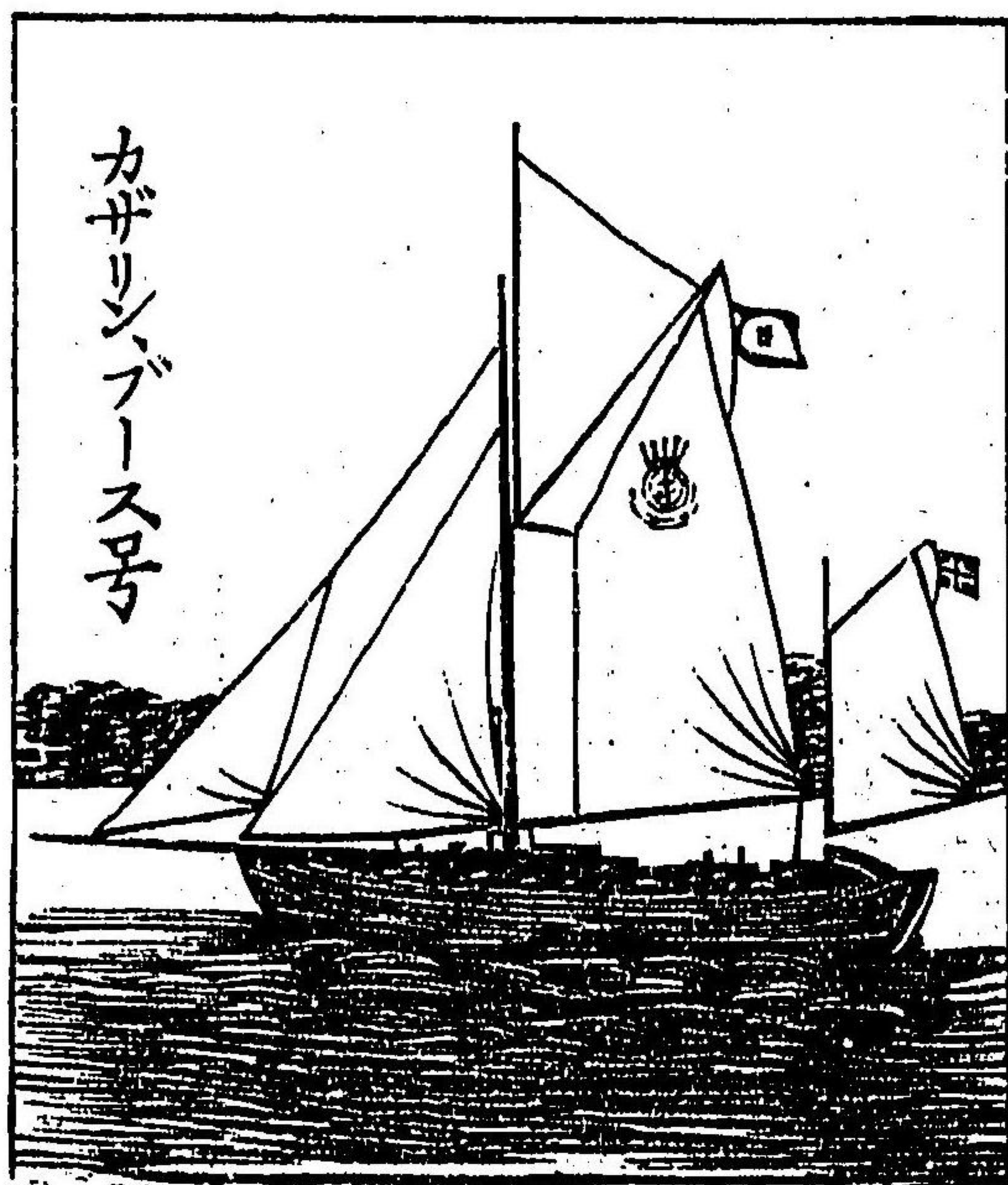
が必要であり、無宿者には寢床、空腹者には之に食物を興へる設備がなくてはなりません。救世軍の社会事業は、即ち此等の需用を充す爲に出

今日救世軍が營む社会事業の種類は、出獄人救済所、醜業婦救済所、安宿、安料理店、育児院、養育院、農業部、授産場、失踪人探索部、法律顧問部等であり升。今左に其統計表を御目にかけてませう。

明治三十二年十二月、世界に於ける救世軍社会事業部の統計表

- 一、社会事業の數 五百八十三箇
- 一、社会事業に従事する役員 二千四百九十九人

SALVATION LIFEBOAT NORWAY.



船助の岸海北威荷

内士官及び候補生 千八百五十三人  
雇人 六百四十六人

- 一、醜業婦救済所の數 九十四箇
- 醜業婦救済所に收容し得る人數 千九百三十七人
- 一年中に醜業婦救済所より出たる人數 五千百五十八人

- 一、安宿及び安料理店 百八十八箇
- 安宿に止宿せしめ得る人數 一萬四千〇四十一人
- 一年間に止宿せしめたる數 三百八十四萬六千〇四十一人
- 一日平均止宿者の數 一萬〇五百三十七人
- 一年間に食物を調へし數 五百九十七萬七千八百九十八人前
- 一週平均食物を調へし數 十一萬四千九百五十九人前

- 一、授産場の數 三十六箇
- 工場其他の數 六十箇

第四章 社会事業



一、貧民街出張所の數

百三十三箇

一、育兒院の數

十七箇

一、出獄人救濟所の數

十一箇

一年間に引取られし出獄人の數

千五百七十人

一、探索部其他の數

七箇

此出獄人救濟所より出たる者の内八割は、一年の後に於ても皆其正業に従事して居ることを發見し、醜業婦救濟所より出たる婦人は、三年の後に於ても八割五分迄、立派に堅氣な世渡をして居ると云ふことであり升。亦非常の好成績と謂ねばなりませぬ。

第五章 大將ブース

「評論之評論」と云ふ雑誌の記者として名高いステッド氏は、今から十年計り前に「大將ブース」と云ふ書物を著はされましたが、其第一章に左の如く申してあります。

大將ブースは十九世紀のシヨルツ、フオックススである。救世軍と友會派の間は表面

上似寄た點がたんと無い。然り乍ら其起原、及び開祖の大なる感化の事などを考へる

時は、我輩は此二つのもの、間に、非常なる類似のあることを認めねばなりませぬ。

救世軍が若も今から二百年前に現はれたならば、或ひは友會派の人々の様に、上品

であつたかも知れない。否々震動派の熱心家が、共和時代に行ふたる突飛の舉動の

如きは、今日此自由にして寛大なる時代に於ても、随分容赦なり難い所があり升。

何に至せ十七世紀の半と、十九世紀の終りに現はれたる、此二つの精神的復興の間

には非常に似寄つた點があり、世に若し人間の靈魂を入かへる術があらば、シヨル

ツ、フオックススの靈魂は、今日ウヰリヤム、ブースの身軀に宿つた者ではあいかど

思はるゝ程であります。(中略)大將ブースは震動派の開祖よりも、寧ろシヨン、ウ

エスレーに關係の深いことを、自分ながら認めて居ます。其れも其等、人間は誰で

も祖父よりは其父親の事を、一層近しく感ずるものである。十七世紀の友會派と、

十八世紀の美以教會と、十九世紀の救世軍人と、此三つのもの、間に、直接の關

係のないことは、歴史を學ぶ者の、何人も皆知る事實である。然り乍ら此三つの運



動は、譬へば高山の頂で打撃ぐる烽火の如く、假令其山と山との間には、薄暗い溪谷が横つて居るにもせよ、一道の光線は慥かに其間を縫ふて居ることを認めねばならぬ。殊に美以派と救世軍の間柄は、近くして且つ何人にも解り易い所であり升。此く論じ起してスタッド氏は、其六章九十四頁の論文を草し、最後に左の辭を以て之を結びました。

以上論ずる所に由り、余は大將ブーンを以て、少くとも今の時代に於て、最も大なる人物の一人なりと認むる者であり升。

ど。亦以て西洋の識者の間に、大將ブーンが如何様に認められて居るかを、察するに足り升。我日本に於ても、有名なる島田三郎氏の如きは、深く大將の人物を賞揚し、いつぞやも「將軍ブーン及び救世軍」と云ふ一論文を、其毎日新聞に掲げられたとあり升。今左に其抜粹を御覽に入ませう。

十九世紀は早くも數日にして盡さんとす。此百年間後代の歴史家をして顛末を記せしめば、永く人間の記憶に印すべき事件東西諸國の間極めて多し。但此舞臺の上

WHERE THE SALVATION ARMY WAS STARTED  
MILE END WASTE, LONDON, ENGLAND.



トニーエウブソールン、地生院の軍世救



現はれたる人物、其國內一部の記録に入る者は幾多あるべきも、一國の記録に不朽の名を留むる者は少し。地上十五億の群衆あるも、類を出で萃を抜け、世界的資格を有する者に至りては、眞に寥寥々晨星の如し。彼の拿破崙帝の如きは世界的軍人と稱すべく、モルトケも亦軍人として優に此部に属せん。政治家として一國の權機を握る者は、各國常に是ありと雖も、其世界的天爵を有する者は世々之あるとなし。此世紀の間、尤も永く世界の視線を其身に集めたる成功の政治家は、クラッドストン、ビスマルクの二大老人耶。此二大老本世紀の末期に逝きてより、世界頗に寂寥を感ず。各國に名家ありと雖、二老に比肩すべき者なきは、其人一國の材にして世界に遍布する勢力を有せざるが爲あり。

今日に於て世界的人物を擧んとせば、予輩は之を政治以外に求めざる可らず。其萬國に涉りて偉大の勢力を有する人物に投票せよと言ふ者あらば、予輩は救世軍の總督ウヰリヤム、ブリスに投票せざるを得ず。翁ハ其特殊の傳道隊を英國に組織して、拮据之を擴張し、今日に於ては英の本國は言ふ迄も無く、歐洲大陸の諸國西球の米

洲到る處其傳道部属の士官軍隊在らざる無く、近年極東の我日本に至る迄、其傳道士官を派出し、説教出版、種々の方法を以て、下層の者を救済感化することに盡力せり。歐人にして木綿の日本衣服を纏ひ、男は疎末なる兵士の帽を戴き、女は飾りなき結髪を爲し、一見異様の看を呈する者を、我都邑の間に見ば、是れブリス將軍を首領と仰ぎ、身を此團體に献じて、救済の爲に努力する者なりと知るべし。

ブリスは千八百二十九年を以て英國ノツチンガムに生れ、壯年メンヂェスト教會の牧師となりしが、教會の常規を守るは、下層の民を救済するに足らずと爲し、別に一種の傳道組織を立て、會衆を隊伍に擬し、牧師を士官に擬し、其名稱悉く軍隊の如く、大少佐尉官を置きて、ブリス自ら之を總督し、稱して將軍ブリスといふ。其萬國に派遣する救世軍は、悉くブリスの指令の下に立つ者にして、其數百萬の衆ありといふ。

翁の夫人尤も才幹あり、今を距ると十年に物故せしが、翁の成功は此夫人の力多しと聞く。其貧民の救助、罪囚の感化、墮落せる男女の救済、逐一整然たる方法あり、



機関新聞あり、雑誌あり、冊子出版局あり、士官養成所あり、儼然たる一種の獨立政府を社會に現して、將軍自ら其樞機を握り、英國に居りて諸國に號令を傳へ、以て十九世紀に傳道の新局面を開き、神言を敷て人道を勸む。其舊儀の諸派を睥睨して、悍然自ら位置を占むる所、日蓮の法華宗門を唱へたるに類して、其地球各國に宣傳する、規模の大なるとは日蓮の一國內に局せる比に非るなり。十九世紀の末期に、世界的人物を指示せよと言は、予輩は此才幹熱情あるブースを推さざる能はざるなり。

大將ブースに八人の子女がある。其總領は即ち參謀總長ブラムウエル、ブースで、此方は倫敦の万国本營に在て、全世界の救世軍を統御して居られ升。「元帥」と稱へらるゝは大將の長女で、其夫少將ブース、クリボロンと共に和蘭及びベルヂエムの救世軍を率ひ、次女は少將ブース、タツカー夫人として北米の救世軍を指揮し、少將エチ、エチ、ブースは歐洲の司令官を勤め、少將イバ、ブース嬢は加奈太の救世軍を司せられ、其季女は少將ブース、ヘルベルグ夫人として、今佛蘭西及び瑞西の軍勢を指圖して居

ADJ. NEWCOMBE



校中ムカトニ

られます。何の方面から考へても、大將ブースは人民の首領たるに、相應しい人物である。身の長が高く、威ありて猛からぬ容貌を有し、其力ある辯説、組織的の才と、勤勉等は、共に最も著しきものと

のである。殊に其勤め働いて倦むことを知ぬ根氣に至つては、多くの勇猛なる精神と、健全なる身軀を有する青年士官が、尙舌を巻いて驚嘆する所であり升。大將は年中救世軍の様々の出版物に多くの文章を寄せられる。唯其丈で

CAPT. YABUKI



尉大吹矢



も聰明なる人物数人前の仕事である上に、又断ず諸方を經廻りて數た度大な集會を司どり、其都度數十百人の改心者を起さるゝ如き、是亦最も有力なる宗教家數人分の骨折であり升。大將は眞に唯一人で優に十人前の働きをして居る人物である。大將に著しい徳は純潔、克己、眞理を愛すると、大胆、堅志、同情等で、殊に最も著しいのは、其靈魂を愛するの熱情であり升。嘗て申さるゝ様「眞一文字に靈魂に往け、極悪人に往けど。又申さるゝ様「余は悔改の座と結婚せり」と。靈魂を愛する一念は、大將の生涯を一貫する精神である。其集會も、對話も、文章も、旅行も、坐作進退も、其他一切公私の事は皆此大精神から行はれて居ます。大將は秩序を重んじ、規律に従ふて事を行ふ人物であると同時に、其柔和慈仁、父の如き心情を有せらるゝとは、万人の等しく仰ぎ望む所であり升。

第六章 日本の開戦及び現況

救世軍の士官が始めて横濱に上陸したるは、明治二十八年九月四日のものであり升。元

ENSIGN ROBSON.



校少ソアロ

に同化して働く筈にて、一行が香港に着するや、豫め日本にて着るべき晴着を買ひ調へ、愈々横濱に到着したる時は、其を着て上陸しましたが、見れば何れもお揃ひの浴衣に、短かい尻古帯をしめ、軍旗を推立て堂々ど、宿

Mrs. ENS. ROBSON.



人夫同

來救世軍の主義として其往々先々の風に同化し、一切内外人の隔をつけざるにまつて居り、之が爲に到る處好結果を得て居ますが其日本に派遣せられたる士官の一隊も、亦同様の主義に因り、早くも日本服を着用し、日本人



屋を指して行軍すると云ふ様なわけで、随分可笑いものでムりました。併し乍ら其熱心に智慧を求むると、又思ひ切て其理解したる所を實行すると等に因て、此る誤謬も日を逐ふて漸く減ずることとなりました。

最初に日本に派遣せられたるは皆英國人で、同勢凡そ十四人、何れも東方の事情を知らず、固より其言語を解せぬ者許ゆゑ、運動の困難は仲々一通ではなかつた。併し乍ら此る中にも一行は、通辨の助を假りて取敢ず東京市中に軍を始むるとあり、段々に手を廣げて其次の年には、早くも横濱、岡山其他の地方にも、小隊を設くる程の運びに至りました。

現今救世軍の日本司令官はブラード大佐夫婦で、之は長らく印度に働いて居られ、非常の成功をなしたる勇將で、恰度昨年春に、日本の司令官に任命せられたる者であり升。書記長はデユース少佐夫婦で、之は日本の國に參られてから、既に三年になり升。ハミルトン少校は日本々營の會計方で、濠洲から來朝したる士官である。而して山室中校は開戦記者兼戰場部附であり升。

大隊長はニューカム中校が東京の受持で、之は日本に參る以前長らく支那に傳道して居たる女士官であり升。矢吹大尉は養成所大隊長として、兼ねて候補生の養成に従事し、岡山大隊長ロブソン少校夫婦は、救世軍の關西に於る凡ての働を預つて居り、水口大尉は上州伊勢崎を大隊本部として上野大隊長を勤めて居ます。尙各小隊及び軍營の所在地は、此書物の終に載せてある故、就て御覽われよ。

救世軍が日本に開戦して以來、未だ數年に過ぎぬ故、其事業は今以て甚だ小さいものであり升。然り乍ら我輩が前途の希望は頗る大い。我輩は神様の御助に因り、必らず著しい働をせずには止め精神を有て居ります。今左に昨年中に救世軍が如何なる進歩をしたかと云ふとを、統計表に因て御目にかけてませう。

日本に於る救世軍の統計表

項 目	明治卅三年一月	明治卅四年一月	一年間の増加
小 隊 の 數	十 二 箇	十 五 箇	三 箇



分隊の數	六	箇	十	箇	四	箇
士官の數	三十八人	六十四人	二十六人			
下士官の數	二十八人	四十三人	十五人			
少年兵の數	八十二人	二百七十四人	百九十二人			
少年候補生の數	無	十九人	十九人			
賛助員の數	四人	百二人	九十八人			
関聯發行高	三千六百五十部	八千三百部	四千六百五十部			
出獄人救濟所に収容し得べき人數	十二人	四十人	二十八人			
醜業婦救濟所に収容し得べき人數	無	二十人	二十人			
平營に容れ得べき人數	五百二十人	千五百四十人	千二十人			

第七章 救世軍の集會

救世軍は屋内及び野外に於て公開の集會を營み升。即ち昨年中に營んだる野戦の數は二千三百九十八回にして、屋内集會に出席したる人數は合計七万二千七百六十五人であり升。

集會の順序は勿論時と場合に因て異れ共、通常は下に掲ぐる如くに營み升。士官は先づ軍歌を擇んで之を讀上げ、會衆一同が之を歌ふことを望みませう。歌がすんで開會の祈禱に移り、一同が跪く時其中の一人が祈禱をする。祈禱の間に「つれ節」を歌ひ、復誰か、祈禱を致し、其が終つた時に司會者は、今一つ軍歌を歌ふことを命じませう。場合に因ては士官が獨吟するかも知れませぬ。其から士官兵士が代るゝ靈魂上の恩寵を証言し、或ひは手短かに救の道を説明する。無論話と話の間には、何遍となく「つれ節」を歌ふのであり升。集會の半途に會衆一同から集金をする。之は其小隊の費用を助くる爲であり升。集會の長さは大凡一時間半位のもので、終に罪を悔改めて神様に歸る人々を招き、前に出て其決心を告白させ、又其覺悟の足りない所を補ひ、共に神様に祈つて、其人が全く基督の救の力を知る迄は、止まない事にあつて居ます。



ENS. HAMILTON.



校少ントルミン

ありませぬ。唯往々酔漢が来て集會の邪魔をすればする位の事であり升。野外集會は二つの目的を以て之を營ひ。即ち一つは屋内集會に人を案内する爲で、今一つは平生決して宗教の集會に來ない人々に向ひ、其居る所に往て之

CAPT MINAKUCHI.



尉大口水

軍歌は通常樂器に合せて之を歌ひ升。殊に大太鼓は最も廣く用ひられて居る。救世軍の集會では政治上の事など一言も説ませぬ。唯福音の眞理を説明し、又は銘々が受たる御恵を証言すること故、固より滅多に反對者の妨害は

に出遇ひ、良心を警醒し、之に耶穌基督の御救を知しむる爲であり升。野戦には士官及び兵士が軍旗を立て、太鼓をうち、行列を造つて軍營附近を行軍し、又所々に立留つて凡そ十五分間宛も、集會をするのが例である。何時も多くの人々は之に群がり集ひ、靜かに其証言や勸告を聞きませぬ。而して中には其が縁とあつて悔改め、救を受けたる者も少くもりませぬ。救世軍は悪と惡の嫌ひなく、年中其勳を致しませぬ。故、小隊の設けてある地方では、此營内及び野外の集會が、早くから其地方での通り物になつて居ませぬ。

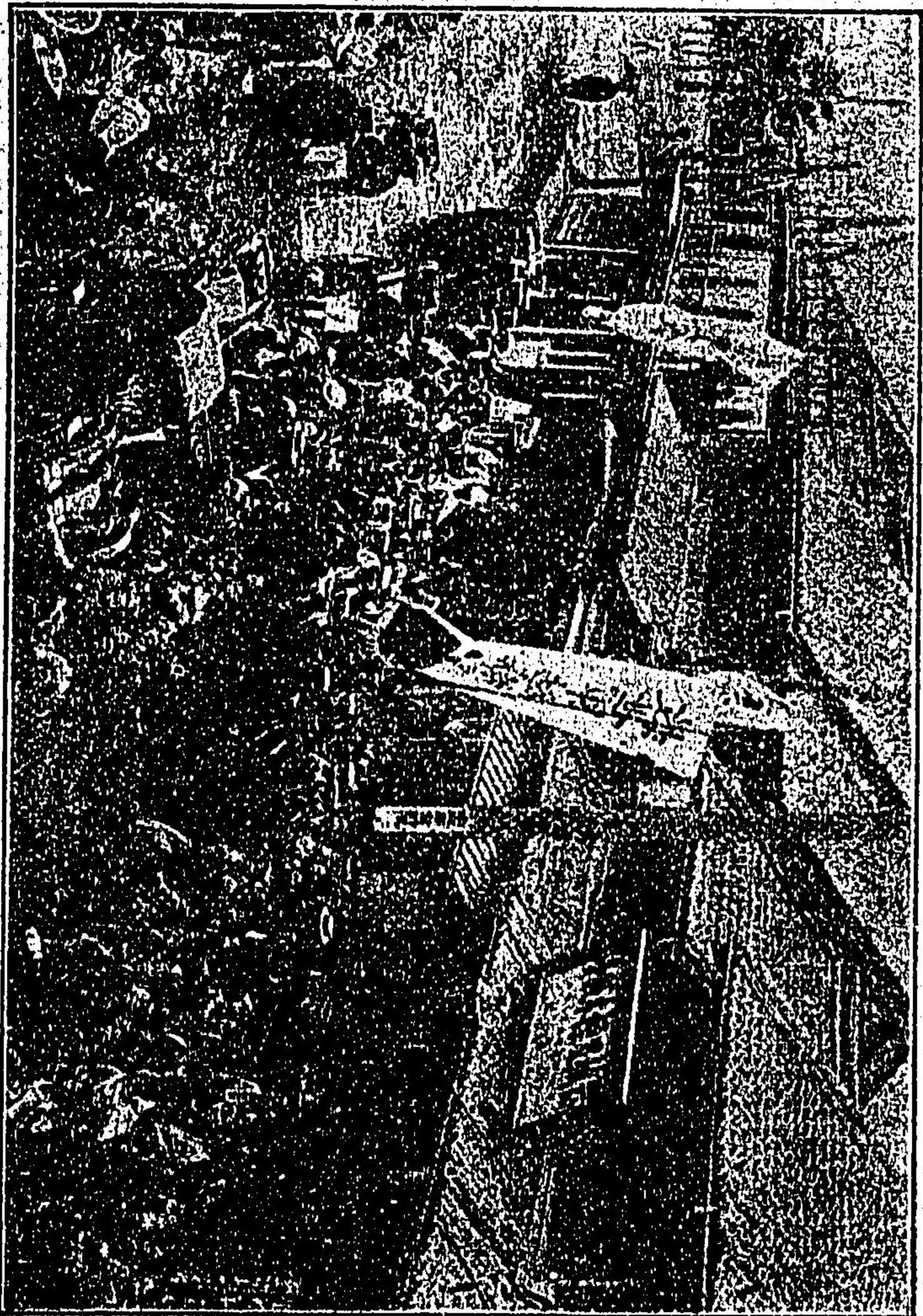
第八章 改心者及び兵士

大將ブーヌ著、救世軍兵士の規律に此う云ふことがある。

救世軍兵士の宗教は三つに分けて之を考へることが出来る。第一自分が先づ罪と其結果から救はれ、更生つて神様の家族となり、其御恵の中に生き、之に伴ふ凡ての喜ばしき結果を其身に受る者となる事。第二其救を維持して之を取喪はざる事。第



SALVATION ARMY MARCH TOKYO.



東京に於て救世軍の軍行

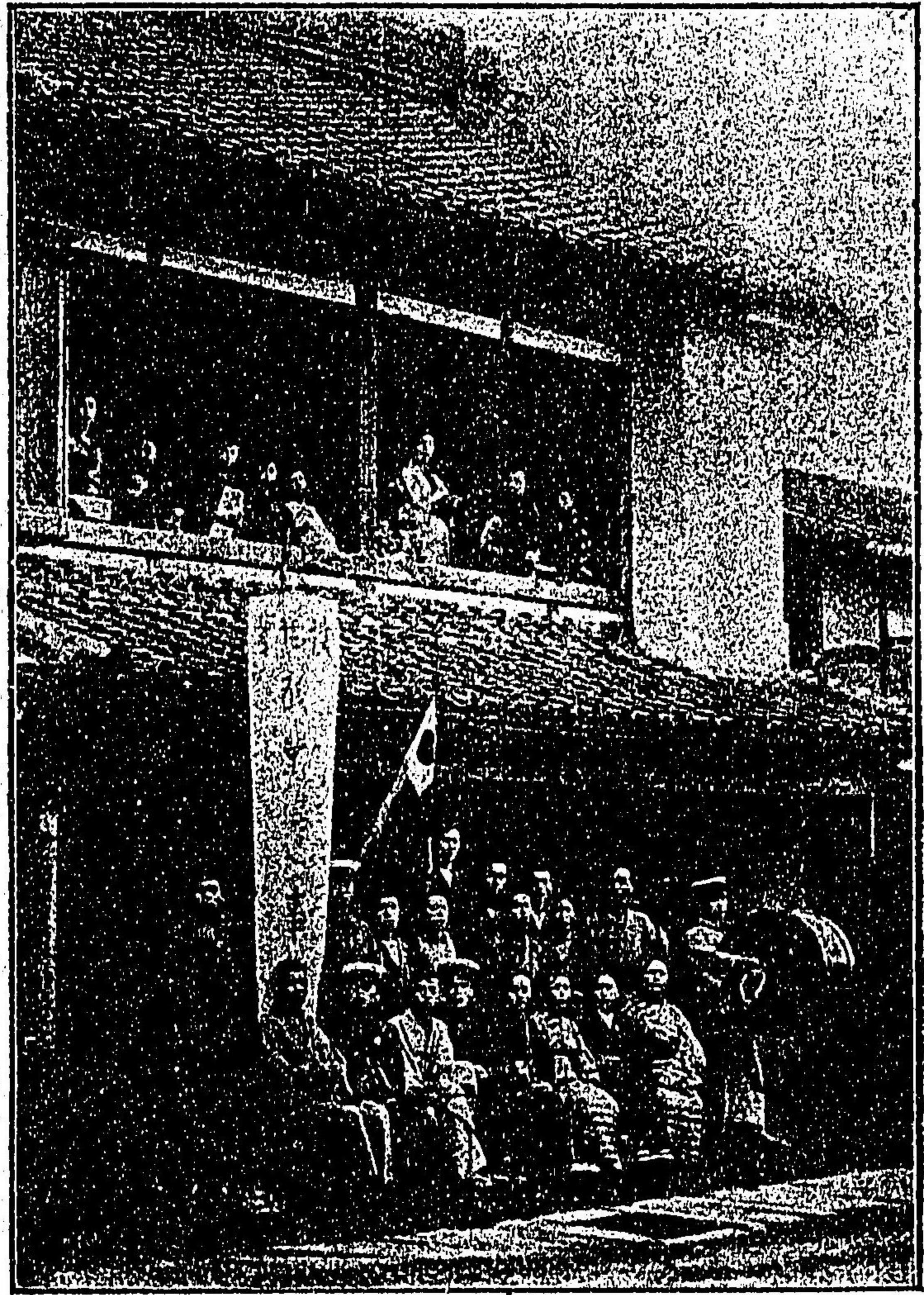
三他人を救ふこと、即ち基督の御一生涯を今一度我身の上に繰返し、其御導に従ふて働き、自分も亦世の救主となる事であり升。

昨年中救世軍に来て耶穌基督の御救を求め、之を見出したる者が無慮八百人あることは、我輩の最も喜ぶ所であり升。此る人々は、大抵皆嘗て眞の神様のことも、亦救主のことも知らなかつた者で、救世軍に由て始めて此等のことを學んだる人々であり升。中には名義許の基督信者で、未だ實際に自分の罪の、赦されたと云ふ経験を有なかつた者が、救世軍に来て之を見出し、以前よりも熱心にして又高潔なる人物となり、己が教會に歸つて往たる者もあり升。時としては旅人が計らず集會に出席して悔改め、直ぐに遠方に歸つて往て、爾來往來の便の絶たる者などもあれど、大抵は軍營附近の人々で、引續き集會に出で、訪問をも受け、其うちには兵士志願者もあり、入隊式を受けて兵士ともなり升。凡て改心者は一應兵士志願者となり、暫らく經つて後に、入隊式を受ると云ふのが救世軍の規定であり升。

救世軍の兵士は眞に其靈魂が更生つて居るのみならず、進んで人を救ふ爲に、出来る



PART OF THE ISEZAKI CORPS.



(伊勢崎小隊(職業婦救濟院)の當時)

其方(たが)を盡(つく)す者(もの)でなくてはならぬ。即(すなは)ち凡(すべ)ての兵士(へいし)は其(その)毎(まい)日(にち)の職(しよく)業(ぎよ)を勤(こ)めつゝ、暇(いとま)が  
われば義勇兵(ぎゆうへい)として、世(よ)の人の救(すくい)の爲(ため)に戦(せん)争(そう)する事(こと)を要(もと)められます。兵士(へいし)を救世軍(きうせいぐん)に  
受入(うけい)るには充(じゆう)分(ぶん)注(ちゆう)意(い)した上(うへ)で之(これ)を許(ゆる)すことになつて居(ゐ)る。凡(すべ)そ入隊(にゅうたい)を志願(しごん)する者(もの)は、先  
づ「軍中(ぐんちゆう)の約束(やくそく)」に記名(きめい)して、之(これ)を其(その)小隊(せうたい)に差出(さしだ)さねばなりませぬ。



救世軍兵士  
軍中の約束

(入隊(にゅうたい)して兵士(へいし)とならんと欲(ほつ)する者(もの)は此(この)約(やく)束(そく)に記名(きめい)調印(てういん)すべし)

一(いち)余(わたくし)は茲(こゝ)に救世軍(きうせいぐん)の兵士(へいし)になり度(たぎ)と云(い)ふ余(わたくし)の熱望(ねつぼう)を表(あらわ)す  
二(に)余(わたくし)は自(みづか)己(か)の罪惡(つみとが)を悔改(くわいかい)め、之(これ)を神(かみ)に懺悔(ざんげ)し、全(せ)世界(かい)の罪惡(つみとが)を贖(あがな)ふ爲(ため)に十(じゅう)字(じ)架(か)にかゝ  
りて死(し)給(たま)ふたる神(かみ)の子(こ)、主(しゆ)耶(い)穌(えす)基(き)督(とく)を信(しん)ずるに由(よ)つて其(その)赦(しやく)を受(うけ)たることを宣(せん)言(げん)する  
三(さん)余(わたくし)は神(かみ)の御助(ごたすけ)に由(よ)り、一(いつ)切(しつ)の偶像(ぐわう)禮(らい)拜(はい)と、之(これ)に關(くわん)係(けい)したる行(ぎやう)爲(ゐ)を廢(や)め、獨(たひ)一(いつ)の眞(まこと)  
の神(かみ)を愛(あい)し、之(これ)に事(こと)へ、之(これ)を禮(らい)拜(はい)すべ(べき)ことを約(やく)束(そく)する



四余は一切アルコール性の飲料を用ひず、又凡ての悪き事、様々の淫猥する行を爲さず、聖靈の力に由て、神と人との前に善良にして眞實なる生涯を送る様、力を盡すべきことを約束する

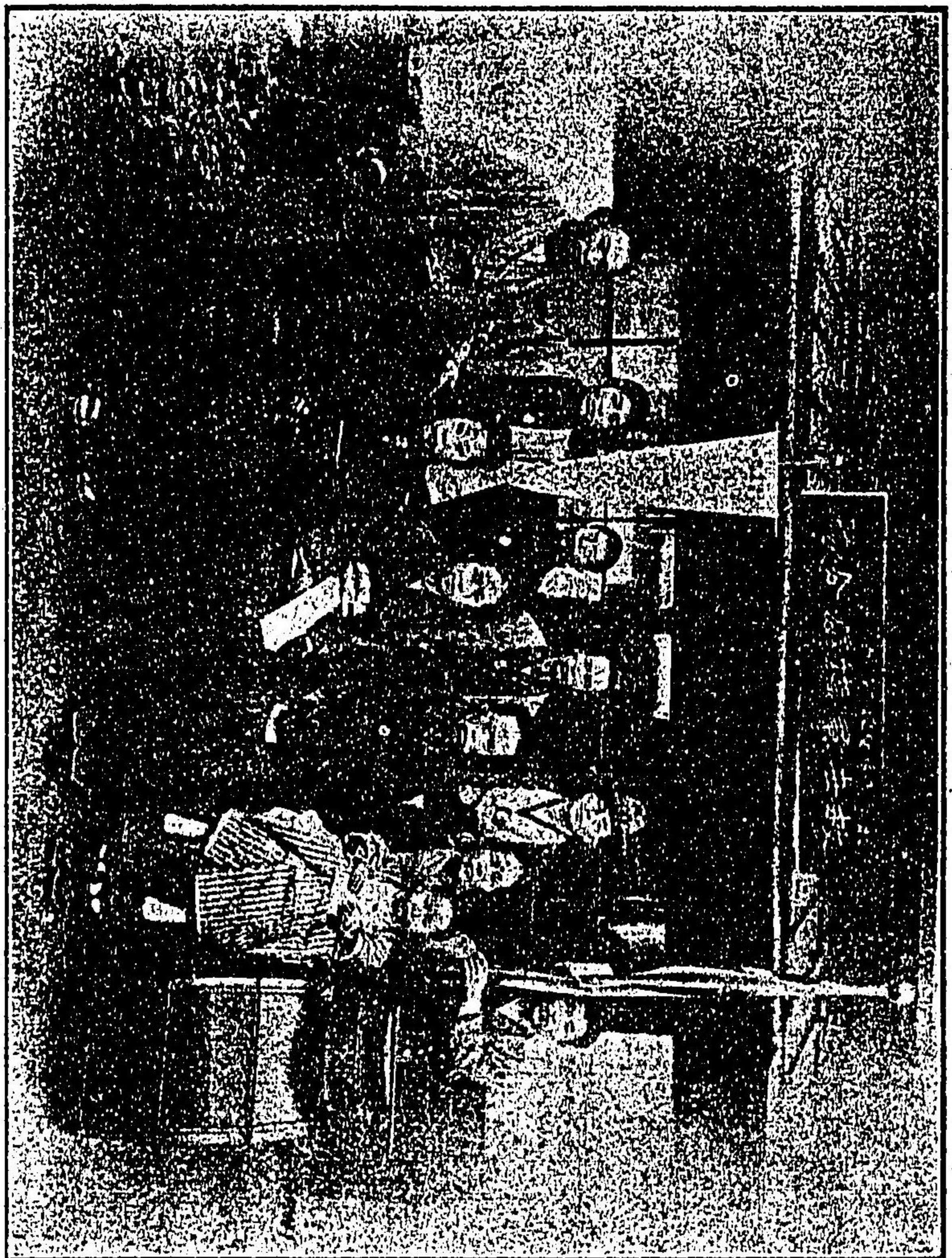
五余は我が士官の指圖及び教誨に従ひ、何れの方面に於ても救世軍に眞實を盡すべきことを約束する。余の精々都合して毎週二回集會に出席すべく又時間の許す限りは士官の指圖に従ふて我小隊の運動の幾部分を受け働くことを約束する

六余は軍隊の運動を支へる爲に、我力に應じて一定の金額を出すべく、少くとも毎月定額の金を献ぐべきことを約束する

七余の神が天國と名くる幸福ある所を備へ、現世にて耶穌基督の賜ふ救を受け、聖き生涯を送りたる者の靈魂が、來世にて其所へ参り神に見へ、贖はれたる人々と交はり、永遠の喜を受べきことを信する旨を宣言する

八余は又地獄と云ふ所があり、邪惡なる生涯を送りたる者の靈魂が、其處にて限なく恩寵と幸福に離れて在るべきことを、信する旨を宣言する

PART OF THE YOKOHAMA CORPS



隊小濱横



明治三十年 月 日

何々小隊 何之 誰印

去年の四月頃の事であり升。一夜一人の客が神田三崎町の原の邊から車に乗り、淺草を指して驅させて、居ましたしが、水道橋の手前まで來ると、車夫は其れ客に向ひ「旦那淺草は何處へ行くのですかと問ふ故、答へて「中」だと云と、車夫は二足三足歩き、馳て舵棒を控へて立留り、徐ろに其れ客を諫めて言ふ様「あなたが然んな所へ出なされることを親御や御主人が、ね聞あすつたならば何とれ考へになりませう。悪いことは申しませぬから、吉原に行く代りに救世軍の野外の集會に行て、神様のね話を聞き、堅氣な人間になつて下されど、誠心を込めて申しますると、車の上の若い客は涙を流し、其親切を謝し、救世軍へは面目なくて、兎ても今夜行くことは出來ないけれ共、以來悪い場所へ行く様なことは断然思ひ留まるから、此儘返して呉れど數た度禮を言ふて車を下り家に歸りました。此車夫は神田小隊の兵士で、夜々車を曳て遣は勉強をする篤志の青年でふりましたが、後神様の御擇みを受け、献身して今は士官候補生の



老女が助けに會集する



一人となりて居ます

上州の伊勢崎小隊に七十歳許のお婆さんがあつて、其初入隊式を受けるにも足が立ぬ故、一人丈坐つて之を受た程の老人ですが、矢張折々は集會に出ることを望みまする故、其親類で之も同じく同小隊の一女兵士が、お婆さんを荷車に乗せ、脊中には赤坊を縛り付た儘で之を曳て参り升。受持士官が見兼ねて他の男兵士に注意し、代りに其荷車を曳て、之を助ける様に取計らひますると、妻君は之を断り、「御親切は有難うムりまするが、其ではお婆さんが遠慮で、自然集會にも参り難うなりまするから矢張此儘に棄て置いて下さいましと申しました。聖書に昔し足腰の立ぬ中風患者を、四人で擔いで基督の所へ運て参つた」と云ふ故事も思ひ出されて、誠に貴い信仰の行でムり升。一人の兵士は晝の間淺裏草履を造り、夜は大道店を張て居まするが、其證言に「私は救はるゝ以前には、頗る短氣な男で年中夫婦喧嘩を致し、一週間に一二度位は茶碗が破れたり、又はお膳の足がもげる様な騒ぎがムりましたるが、救はれて後は全く右様のことが無なつて終ひました。其のみならず唯今は、毎日神様と偕に起き、神様と偕に働き、又神様と一緒に寝んで、真に幸福に毎日を送つて居ます。神様と一緒に起ると云ふは、悔改める以前には、豆腐屋が來ても、納豆屋が通つても、目は醒め乍ら臥床の中にモク／＼して、仲々容易には起出させぬでしたが、更生つて後には目が醒るど直ぐに飛び起き、今日又一日生延びさせて下されたる神様の御恵を感謝して、直ぐに仕事に取りかゝります。神様と一緒に働くとは、以前に兎角見かけ許の品物を造り、少々位申分があつても、大道で賣る分には差支ないど云ふ様に心得て、随分不正直な商賣をして居ましたが、今は同じ品物を造るにも、人様が買ふて益になる様子を造ることを勉め、夜店で賣る品物も、家で賣るのと同様、念を入れて製造する様にありました。又神様と一緒に眠ると云ふは、基督の御救を受ける迄は、夜分仕事を終ふて後に、小説を讀んだり、無駄談をしたりなをして夜を深し、自然朝寢をしては翌日の仕事に、差支の起る様さごと許して居ましたが、救はれて後は毎晩仕事かすむど、直ぐに神様に感謝して臥床に入り、快く眠つては翌朝早く起き出で、働く様に心がけることゝなりました。私しは此くして毎日、神様と偕に起臥をなし、神様と偕に



働き、神様と偕に歩むことが出来る故、眞に幸福でゐりますと。

救世軍の兵士にして既に此世の旅路を終へ、安らかに天國に歸りたる者が幾人かありまするが、神田小隊の會計故添田正三郎氏の如きは其一人であり升。會計は福島縣人で當時某中學校の生徒でゐりましたが、一昨年の正月に九段坂で營んだる救世軍の野戦に通るかゝり、其説教を聞いて感心し、爾來續けて神田小隊の集會に出席することあり、問もなく救はれて兵士になりましたが、二三月後に國元の父上は、梓の様子を見に遙々田舎から出て參られ、會計の心がけ、品行が見ちがへる程立派になつて居る許か、勉強の方も大きに進んで居るを見て深く喜び、即ち神田小隊の受持士官を助ね、其れ禮を申述べて歸國せられました。同年の暮今度は一週間程滞在する見込で、父上に於ては再び東京に出て參られ、若し出来るならば、梓が受たる基督の救を、自分にも受たいものであると、下宿屋に宿つて居て、救世軍に通はるゝととなりましたが、神様はいかでか此の誠實なる求道者を見棄て給ふべき、問もなく父上は其罪惡を赦されて、更生つたる人間となり、これまで信じたる偶像を棄て、嗜んで居た

る酒を禁めて、喜び勇んで其故郷に歸つて行かれました。すると同じ村の中でも有名な大酒家某と云が、此有様を見て亦大きに感心致し、「おあなたは東京に往て來てから、丸切り酒も飲ない様だし、何だか大層幸福に見受けられますが、是は何う云ふわけですか。若し出来るならば、私も何卒あなたの様に眞面目な世渡をし度いものですと云ふ。」否其れならばあなたも東京に往て救世軍に入つたら可いので

LATE TREASURER SOYEDA.



故添田會計

う。其でも一人では様子が分り難いから、今度あなたも往く時同道を願ひ度いもので



す、宜しい其では此次の時、御一緒に参りませうと、早速相談が纏りまして、兩人打連れて東京に参られたのが去年の春のことですか、此度も一週間許滞在して精々と集會に通ふて居る間、此人も亦よく救はれて更生つたる人間になり、兩人共立派な救世軍の兵士として歸國致し、今も美はしい信仰の生涯を送つて居り升。此くして會計の熱心なる信仰は、其親を救に導き、其故郷に基督を紹介しましたが、其許りではなく、三崎町邊で會計が暫くの間、二階を借りて自炊をして居た家の妻君も亦、會計が他の青年と異ふて非常に眞面目なと、温厚なるとなどに感心し、救世軍の集會にも出席する様になつて、間もなく基督を信じ其兵士とありました。然るに惜い哉會計は、昨年の夏の初、中学校の卒業試験前後から病氣になり、試験がすむと歸國して、病院に入り養生すると凡そ七十日、健康が日に衰へ、終に最も惜かなる來世の希望を以て、安樂に天の父の御下に歸りました。其葬儀には山室中校が立合しましたが、會計の友人にして悔改めて基督を信する者が其節にも起つたと云とである。會計に幼い弟があつて、よく亡兄の志を嗣ぎ、けなげな精神を以て其學問を勉強して居ます。左に掲ぐるは先達、同人から山室中校へ寄せたる手紙であり升。

拜啓貴家益々御壯健にて奉大賀候私方も一同無事暮居候間御安心被下度候過般來よりは大戦争大勝利の由とさの紙上にて拜見仕り欣喜の至に候兄正三郎存命なれば定めし一方の大將となりて大敵を亡し神様の御心を安め奉ると思ひ候へ共只今は天國にあつて皆様の御働を一目するのみ遺憾の至に御座候小生も成長の後は上京して賢君の命令に従ひ一方の大將とあつて見事に強敵を打碎き美事なる文明國と致し度く神様に祈り居り候夫れまでは本宮學校に通學し勉強仕り居候本年の成績は我級第一の成績を得通信簿を御送呈申上度心得にて是又神様に祈り居候先づは御伺まで早々以上

添田義治

兵士の中殊に最も熱心にして善良なる人物を擇み、之を下士官に任じ、其屬する小隊の働を助けとせ升。下士官の中には曹長、會計、書記、其他の軍曹を含んで居る。救世軍の事業には様々の方面がある故、苟くも人の靈魂を救ふとに熱心する人々は、



必らず相應に其志を伸べる餘地があり升。下士官及び兵士の中、信仰殊に篤く、力量ある人物にして、境遇の障りなき者は、士官候補生を志願し、本營の許可を得たる上にて、其養成を受け、雖て救世軍士官に任せられ、生涯唯此事業の爲にのみ働くことが出来ず。

### 第九章 出獄人救済所

監獄は犯罪人を抑留するに必要な場所であらう。然り乍ら犯罪人は監獄に入つたから、屹度善い人間になつて出ると云ふものでなく、却つて往々其反對の結果を見る様な場合があり升。殊に一週監獄に入つた者と云へば、世間の人に指彈をされ、地位を失ひ、職業を失ひ、食ふ物にも困る様な場合がある故、其が爲に最初には然らざる惡人でもなかつた者が、後には破れかぶれになつて、大變な惡党となる様な、例が少くもりませぬ。救世軍は監獄から出て參つたる人々を引取り、之に起臥をする場所を備へ、之に其職業を授けて、再び正徑な世渡に立歸らする様骨を折て居ます。而して之が爲に

設けてある場所を出獄人救済所と云ます。

法律に因るに犯罪人が一通の處刑を終へ、唯監視丈が残つて居る場合に、若し然るべき引取人があれば可、然らば柿色の着物の代りに、今度は淺黄色の着物を着て、別房留置と云ふことになりす。救世軍は此る引取人のない被監視人を、出獄人救済所に連なふて參り、親兄弟になり代つて、カサ井中尉であり升。被保護者は新しく來る者、地位を得て出て往く者など色々代りがありす。唯今現在員は三十三名で、皆其儲けた中から一定の食料を支拂ひ、残りの金は之を士官に預けて置き、救済所を引取る時其を資本に、一事業を創るとか、

CAPT TAKAHASHI.



高橋大尉

其世話をする事になつて居ます。救世軍が此事業を始めたのは、明治二十九年十月で、現在之を受持つ士官は高橋大尉夫婦



何とか云ふ様な、有益なことに費ふ様貯蓄して置ます。

一定の時日に集會を營み、其精神上の感化を致しまするが、被保護者の中儘かに基督の御救を受け、更生つたりと見なすべき者も随分あります。而して此云ふ人々の間から、神様を崇め、其業を勵む、眞面目な人間の起ることを見るは、我輩の感謝に堪ぬ所である。爰に何某と云ふものがあり、以前は静岡縣で學校教師をして居ましたが悪友に交際ふた爲に放蕩の行爲に陥り、果は金につまつて人の物を盗み、其職を罷られるは勿論、監獄に送らるゝこと、ありましたが、さて刑を終へて出て來た處で、誰も取合ふて呉れるものがない所から、又もや悪いことをして今度は滿一年の處刑を受けました。然るに明治三十一年の暮、同人が滿期に近い時救世軍の士官は之を訪ね、其監視引受人となつて救済所に引取ましたが、同人は救済所に居る間に更生り、監視のすんだる後は、在東京の兄の處に移り、正業を營みつゝ、今は救世軍某小隊の兵士として、眞面目に神様に事へて居ます。

又何某と云ふ者があつて、懶惰と悪い習慣の爲に、困窮して貧の竊みをし、二回入牢

し、親類縁者にも見限られて居ましたが、救済所に引取られて後悔改め、其心がける行爲も、共に以前と異ひ、精出して仕事を勉強しまする故、凡そ八ヶ月も経つて後、士官は其國元の兄へ詫をしてやり、今は其郷里なる石川縣に歸り、随分堅くやつて居るそう、毎度手紙を寄し、救世軍の御恩は決して忘れませぬと云て居ます。

爰に又今年三十八才の男子で、前後十二年を監獄の中に送つた某と云ふ者があり升。監獄に入つた數は九回で、四回は竊盜、三回は喧嘩で此中一度は、甚く巡查を毆打して怪我をさせた爲だと云ひ升。今二回は賭博犯であつた。此男が始めて救済所に來た時、行末何うであらうかと随分心配しましたが、間もなく悔改めて、正直なる勉強家となり。其様子を親類に知らせてやると、皆大喜びで深く救世軍の親切を感謝して居ます。同人が救済所に來て五ヶ月になります、近所に相應しい仕事を見付、毎日通ふて精々と働いて居ます。

今年廿一才になる青年は從來に三回入獄し、前後二年半を其中で費しましたが、両親は怒つて之を勘當して終ひ、滿期になつても引取人のない所を、救済所に引取ました



が、之も同じく基督を信じて、新しい人間にありました故、其事を知せてやると父親は數回訪ねて来て其實際を視、終に勘當を赦して其家に連れて歸りましたが、爾來同人はよく親に孝行を致し、影日向なく働く許か、殊に其親の病氣の時などには、行届ひたる介抱をして呉れたと云ふので、今は親までも神様の有難い事、又基督の救の確實なることを嘖美して居ます。

又一人は今年二十二歳の男子で、四度入牢しましたが其三回の竊盜犯であつた。満期にあつても親兄弟が相手にせぬ故、教誨師から救世軍に紹介せられ、之を引取るこゝになりましたが、同人も今は深く前非を後悔し、引取てから恰度七ヶ月目の今日は、以前に然う云ふ犯罪をした人などは、受取れぬ程立派になつて居ます。毎日汗水垂して労働し、夜は夜學に通ふて勉強する許か、朝は四時半に起て、仕事に出る前に本を讀んで居ます。

此の如き多くの好結果を見るに付、我輩は金銭と時間を費して、出獄人の爲に骨を折る甲斐のあることを、深く心に感ずるものであり升。監獄署及び警察署は大層親切

OFFICERS AND INMATES OF EX-PRISONERS HOME



若護保及び官士の所濟救人獄出



第十章 醜業婦救済所及び自由廢業  
五十四  
て、始終直接間接に事業の便利を計つて居らるゝことは我輩の謝する所であり升。

第十章 醜業婦救済所及び自由廢業

庄司甚右衛門ある者が始めて元吉原を開いたるは元和三年のことで、其から四十年を経て明暦二年に元吉原が新吉原に移さるゝに至り、此里の繁昌は又一層に加はりて、果は吉原と云ば日本全国の模範遊廓と見あさるゝ程に立至りました。昨明治三十三年九月、吉原貸座敷の敷は百六十戸、娼妓の敷は三千二百人、東京府下では貸座敷が四百七十八戸、娼妓が六千八百三十五人、明治三十一年の統計に因るに、日本全国にては娼妓五万五千五百五十三人、藝妓三万三千八百八十六人、其他の賣淫婦が八万人、合計十六万九百三十九人の、如何はしい婦人があつたる勘定でより升。

元吉原の開基から二百七十年を経て、明治五年に至り、太政官布告第二百九十五號を以て一人身を賣買致し、終身又は年期限り、其主人の存意に任せ虐使致候は、人倫に背き有まじき事に付、古來制禁の處、從來年奉公等、種々の名目を以て奉公住爲

致、其實賣買同様の所業に至り、以ての外に付自今可爲嚴禁事(中畧)娼妓藝妓等年期奉公人一切解放可致、右に付ての貸借訴訟は總て不取上候事と、達せられましたので、以來人身賣買と云とは、全く跡を日本の國に絶たる筈であれ共、其實數百年傳來の悪い風習は、仲々然らう容易には革り難く、其後に出來たる貸座敷と云ひ、出稼娼妓と云ものに至りては、表面上自分が好きで醜業を營む婦人達が、他の貸座敷を營業とする者から、部屋を借りて居ると云ふ關係に止り、別段其間に人身賣買の嫌などは、少しも無いとにあつて居るにも拘らず、實際に立入て見れば、五萬人の娼妓は悉く皆、所謂前借金と云ふ代金に其自由を買れて、貸座敷營業者の奴隸となり、否が應でも醜業を營まざるゝと云ふ様な、境遇に身を沈めて居る者であり升。其さへ貸座敷營業者及び、之に附添ふ人買等の狡猾なる手段に因り、所謂前借金は其半分か三分の一しか婦人又は婦人の親には渡さず、扱婦人が愈々娼妓となつたる段には、病氣の手當だとか、着物の調達だとか云ふことを口實にして、いやが上にも借金を作らせ、最初二百圓の前借で娼妓にあつたる婦人が、三ヶ年精々を稼いだ結果、却つて三



四百圓の借金を背負ふて居ると云ふ様などに致し、可憐なる婦人達の、息の根の繼ぐ限りは何年でも無理に引留めて、強て賈淫をさすると云ふ様な、誠に慘酷極まることを任向けて居たる次第であり升。然りとて娼妓達の中、若し其營業を厭ふて逃亡すれば、直ちに警察の手で捕へられ再びもとの貸座敷に送還される。此くて居るには居られず、出るには出られず、失望落膽の結果が、金につまつた男などを見立て、情死と云ふ名の下に自殺するのが、此社會に珍らしからぬ事實でふりました。東京で娼妓をして居る婦人の四割は、岐阜愛知兩縣の婦人で、其わけは此地方の風俗が、格別に悪い爲でもありませんが、亦其天災地變に際し、貸座敷營業者、又は人買等が出かけて往て、巧みに年頃の娘や、其親達を説おとし、連れて歸つた者だと云ふことである。近來でこそ十八歳以下の婦人は、娼妓になれぬ規則になりましたが、以前は未だ其よりも年若い婦人が、無慘にも其蓄の花を道樂者の爲に荒され、汚されて居たのであり升。而して或る祝日の夜、吉原の某樓では、一人の娼妓が平均十一人宛の客に接したと云ふ様な例もあつて、吉原三千人の娼妓の内、病院に入居る者は、平均二百人以上三百人あ

ON THE EDGE OF THE PRECIPICE



りな道近く往に黙地は瀕放



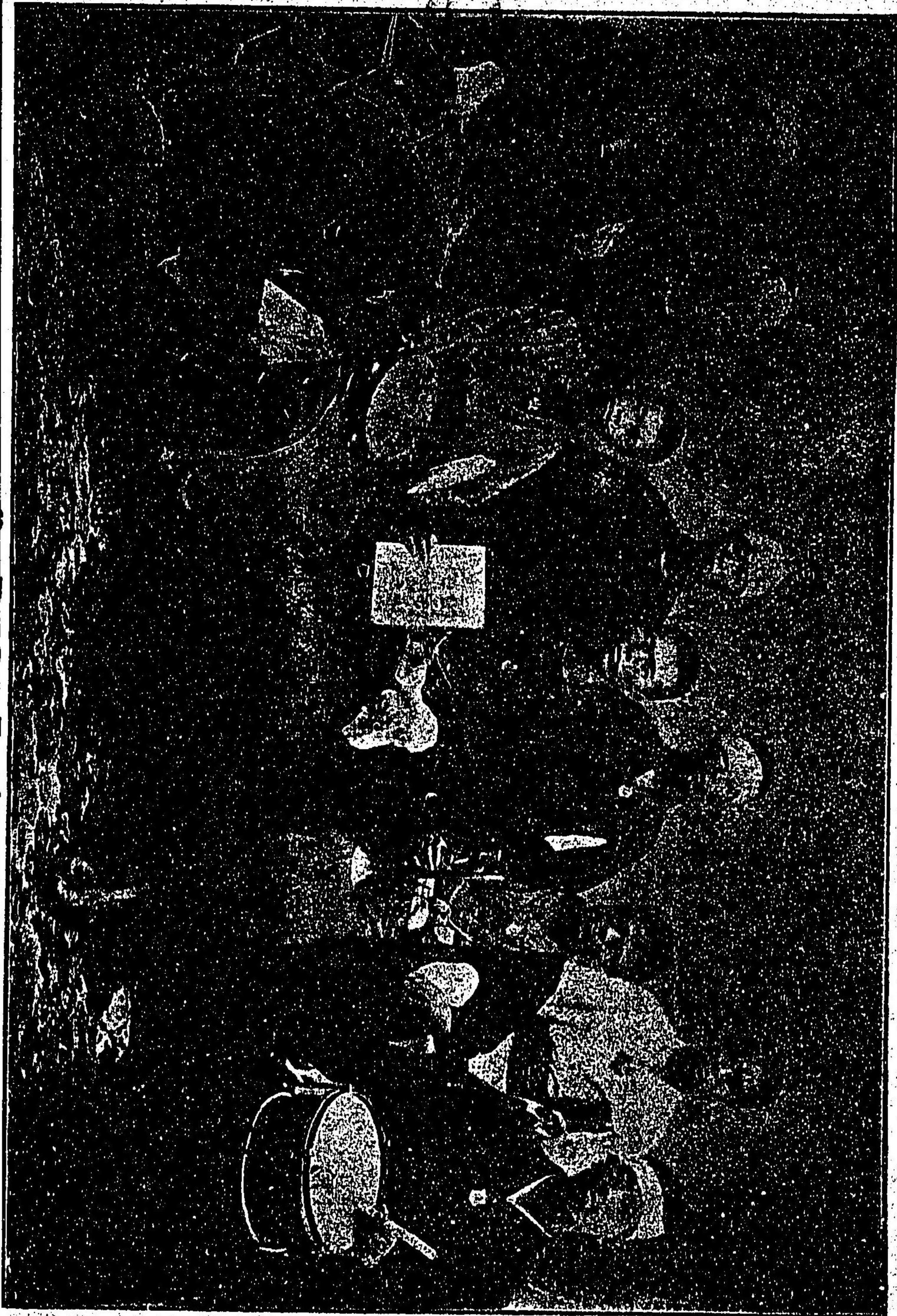
つたこと云ふことであります。

此時に當つて救世軍の如く、世界各国に於て最も手廣く、醜業婦救済に従事して居る團練が、何うして黙つて之を見て居ることが出来ませうか。そこで「何とか此娼妓等を救済する工夫はないものであるか」とは、救世軍の日本開戦以來、何遍もなく繰返されたる問題であり升。然り乍ら當時は誰も皆、同じ様に答へて「到底だめです、仮令貴君等が外國の様に、醜業婦救済所を日本に設けられた處が、誰も来て世話にあるものはふりませぬ。第一娼妓等は貸座敷主人の言が儘に、借金を拂はなくては、何んなに自分で正業に復し度ても、其丈の自由がないのですからと、此様に申されて居りました。

時あるかな、去年名古屋在留の宣教師ユー、ジー、モルフ氏等が、起て娼妓の自由の爲に法庭に争ひ、娼妓は前借金の有無に拘らず、意の儘に其營業を廢め得ると云ふことを明かに致されました。是に於て兼て此問題に苦心して居たる救世軍は、其七月を以て直ちに醜業婦救済所を東京に開き、廢業したる娼妓を引取つて、之を感化保護す

る道を立て、次で八月一日を以て醜業婦救済所の開張を發行し、愈々我輩が此事業に着手したる由を、天下に發表致しました。救世軍の様子を知て居る人は、其士官兵士が毎々関聲と云ふ印刷物を諸方に賣つて歩き、之に由て世の人を悔改に導き、救に導かんと勉めて居ることを御存知でありませう。此特別號の関聲が發行とあると、各小隊の救世軍人は、何れも之を其最寄の遊廓に持て往て賣りましたが、吉原に於ては貸座敷營業者、及び其雇人等が、此事に氣が附と打驚き、最初東京第一小隊の、高城大尉以下が、出かけた頃には傍から之を買ひ求め、成る可く娼妓の手には入らぬ様にわしらふて居ましたが、復しても救世軍人が根氣好く推寄て來ることを見るや、終に同五日神田、本郷二小隊の聯合軍が、矢吹大尉の指揮の下に、揚屋町の角に立て演説をし乍ら、頻りに関聲を賣て居る時、數十人一時に襲ふて之を毆打し、其數人を傷けました。當時逸早く此様子を其翌日の新聞に報導したるは時事新報で、翌々七日は東京市中の各新聞ども、一齊に之を掲げましたが、中にも毎日新聞の如きは、殆んど全紙面を此等の記事に用ひ、殊に其社説欄に於て左の如く論じました。





救世軍芳原に罪惡と闘ふ

救世軍が「娼妓の廢業する者は之を助けて正業に就かしめん」との文を其機關紙「闘聲」に掲げしは、數日前の事ありき。彼道義的勇士は更に進んで其實行に着手し、此印刷物を芳原に配布しつゝ、其趣意を演説したり。此一舉は彼妓樓主人及び之に附隨する醜類を震慄せしめ、遂に暴行を救世軍の人々に加ふるに至れり。蓋し此人々の決心、天下の罪惡と挑戦するに在り。歐米に於ける此團練の捷利は、既往に顯著なり。區々の暴行決して其銳鋒を挫せしむるに足らず、却つて一層の強銳を加へんと、吾人の疑はざる所あり。彼人々は被害の顛末を公衙に陳告せしも、自ら被害の回復を訴へずと聞、是れ其犠牲的精神より來れるなり。吾人豈其志を壯とせざらんや。然れ共暴行の事實あり、被害の事實あり、政府は人民保護の職分を盡さざる可らず。吾人は其事實を搜索して之を詳報し、爾後當局の爲す所如何を觀んと欲す。

救世軍の主張する所は廢娼論でゐなくて、醜業婦救済である。即ち現在醜業を營んで



居る婦人達が、改心して正業に就きたいと云ふ時、其丈の自由が無い筈はないと故、若し然う云ふ娼妓があらば、充分相談相手になつて廢業をさせ、廢業した上では之を引取り、先の先まで見届けてやると云ふ、是が救世軍の最初からの主張でムリました。其かあらぬか、大佐が職業婦救済所の開張を發行せらるゝ當時は、或ひは二三の新聞紙が、少しく之に注意する位かと思ふて居られたにも拘らず、一旦吉原の椿事が起ると共に、廢娼論の急先鋒たる毎日新聞を始めとし、二六新報、萬朝報、新日本などよりして、東京市中の各新聞、さては全國の新聞雑誌に至るまで、一齊に救世軍の此舉に賛成し、數十枚の新聞切抜は日毎に本營の机上に堆く、所謂自由廢業の熱語は、忽ちにして津々浦々に迄反響するとなりました。

其間には娼妓又は娼妓の父母より、救世軍へ宛て其救済を申込んで来る者が續々現はれ、救世軍は又直ちに引受けて其運動に取かへりましたが、警察署に於ては、娼妓の廢業届には三業取締の印がなくては、之を受付るとが出来ぬと断り、而して取締は固より貸座敷業者及び自分共に不利なる、娼妓の廢業届に捺印し様等がない故、救世

軍は暫らく此等の問題と戦ふて、未だ容易に娼妓を救ひ出すとを得ませぬでした。とは云へ職業婦救済所は、此間とても全く空虚で居つたわけではない。八月八日には既に茨城地方から救ふて参つたる一酌婦を受入れ、繼で洲崎から遁て來たる二人の娼妓、上州から参つたる二人の酌婦を收容し、兎も角も八月中に前後五名の被保護者を收容して居たことであり升。越へて九月四日吉原に於て、二六新報社員が危険を冒して一娼妓を救ひ出したる日は、恰かもデューズ少佐、及び山室中校の兩人が、洲崎に一娼妓を救はん爲に出張したる歸途、暴徒に襲はれて傷いたる當日で、其遭難の場から深川警察署に引揚る途中の如きは、凡そ四十人の警官に保護せられた様も次第であつた。

此くして輿論は益々此問題に熱して居る時、終に九月の始に至り、内務省は訓令を發し、警視廳又其娼妓取締規則を改正し、以來娼妓は廢業届の加印を取締に求め、若し取締に於て之をがねんせざる時は、理由を具して之を其所轄警察署に届出れば足りると云ふことになり、此問題の解釋に一步を進めましたが、其より新に廢業する娼妓

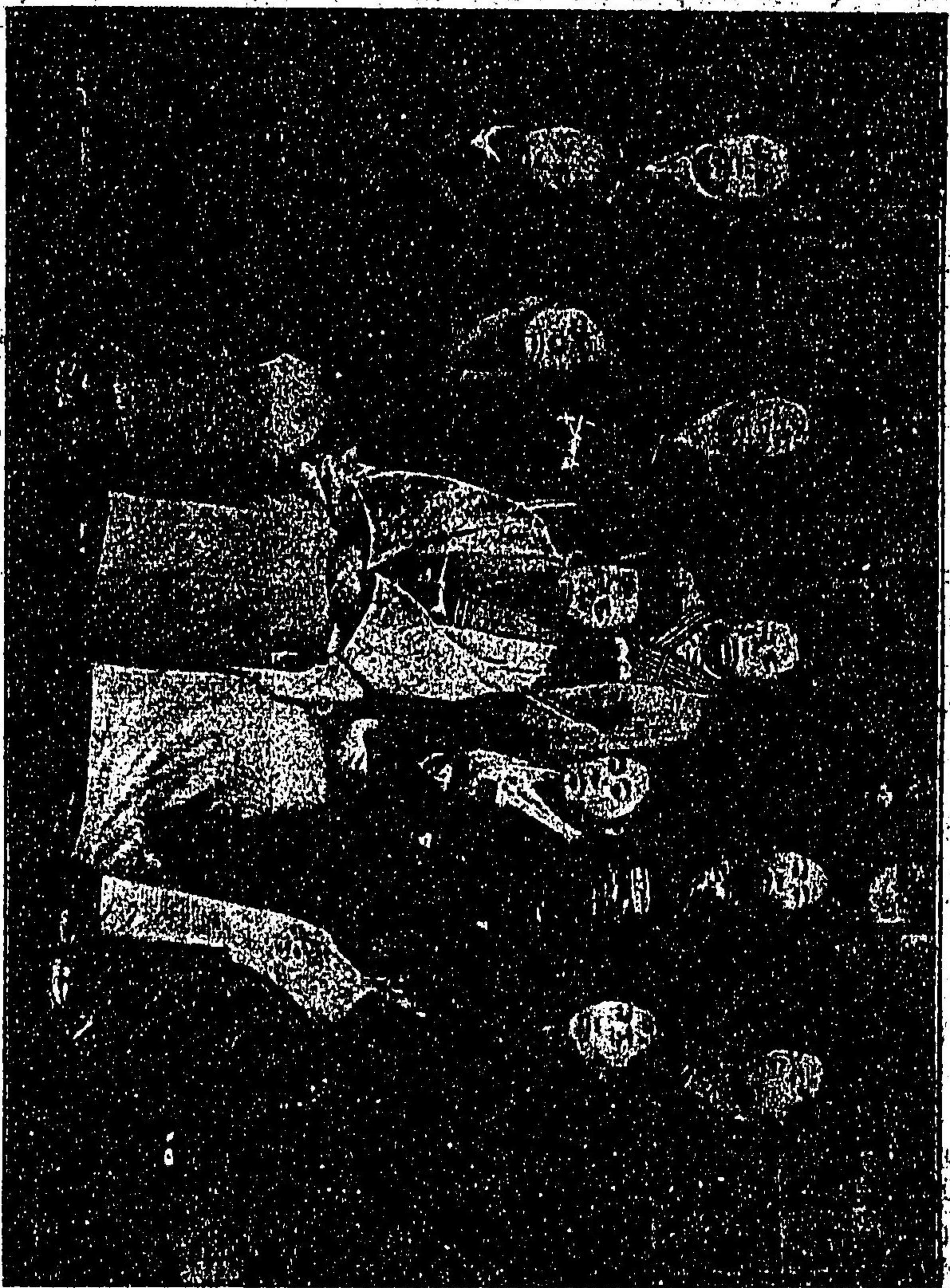


が漸く現はれて来ると共に、貸座敷營業者の狼狽は其度を高め、救世軍人又は新聞記者らしい者が、遊廓附近を徘徊すると見れば、直ちに襲撃すると云ふ様な有様で、或日曜日如きは一隊の暴徒が、救世軍本營及び少佐の家を襲ひましたが、警官の保護の行届いたる爲め、事あくして終ることが出来た。又此頃ブロード大佐以下が、一娼妓のことに就て吉原に出張せられたる時の如きは、五六十人の警官が之を保護し、而も其歸途には餘りに危険だからと云ので、取締事務所の非常口を開き、一同裏口から歸つたこともありました。

當時遊廓の物騒なことは非常なもので、黒紋付の羽織を着た男を見れば、救世軍だと云て直ぐに袋叩にする様次第、洲崎では「ソリヤ救世軍が来たと言へば、兒供の泣が止つたと云ふ位であり升。随つて客足も大さに減じ、九月中東京許でも、平均毎夜二千人宛、遊客の數が減たと云ふ事であり升。

内務省が非常の英断を以て、新に娼妓取締規則を發布したるは、實に十月二日のことであつた。これ迄は遊廓及び娼妓の取締規則は各府縣區々でふりましたが、こゝに至

OFFICERS AND INMATES OF RESCUE HOME



救世軍救済所及び官士の所



つて日本國中の娼妓が、全く同じ規則の下に取締らるゝこととなつた。而して此規則に因れば、自今廢業を望む娼妓は、自分から警察署に出頭し、口頭又は書面を以て其名簿削除の申請をさすべく、然すれば警察に於ては直ちに名簿を削除して、娼妓は素人にされる筈で、何人とも雖も若し娼妓の名簿削除申請を妨害する者があれば、廿五圓以下の罰金、又は廿五日以下の重禁錮に處すると云ふ、嚴重な規定になつたのであり。此くして我輩が數月間力を盡して戦争したる、娼妓廢業の困難と云ふ問題は、此規則に因て解き去られたることである。

願みて救世軍が最初醜業婦救済所を開き、醜業婦救済所の開張を發行したる當時より、今日に至る迄の事を懐へば、固より相應の難義心配が其間に在たに相違なければ、亦様々の喜ぶべき事が、成就せられて居ることを認める。今其二三を擧れば

- 一、五萬人の娼妓は其前借の有無に拘らず、何時でも自由に廢業することが出来る様になつて、最早身の不自由を苦に病み、自殺したりなどする必要の無なつたる事

- 二、東京府下のみにても、昨年中に廢業したる娼妓の數が、千百〇六人に達したる事
- 三、内務省の規則に因り、今後は十八歳以下の婦人が娼妓となるを禁せられたる事
- 四、新に娼妓を抱へるものも、抱へらるゝものも、ずつと其數が減つたる事
- 五、以前は平氣で遊廓に繰込で居た人々が今は世間を耻て控へる様にあつたる事
- 六、貸座敷營業者の中、段々に廢業する者が現れ、現に最初救世軍が交渉したる某樓の如きも戸を閉めたる事

七、醜業婦救済所に收容せられたる婦人は臈て親元、又は知人へ渡し、或ひは暫く引留めて、其末始終を見届けて居ますが、何れも好成績で、今後共醜業婦救済所が、殊に頼る邊なき薄命なる婦人の救済に、最も適當なることを認め得る事然らば此運動が救世軍の、精神的の方面に如何なる關係があつたかと云に、何地にても人々の注意を喚起し、新に多くの友人を得て、万事好都合でより升。現に先達て大佐、少佐、閨聲記者が打連て、諸所に轉戦したる時の如きも、到る處入り切さい程の來會者があり、唯一ヶ處を除く他は、最も靜肅に、同情を以て其説く所を聞き、悔改



ひる者あり、金を寄附する者がありて、勝利を得たることでゐる。救世軍の醜業婦救済事業に同情して、之が爲に色々盡力したる友人、同情者は、数多くある中にも江原素六、島田三郎、根本正、安藤太郎の四氏が、連名で義捐金を募集せられたる如きり、我輩の感謝に堪ぬ所であり升。

救世軍の運動を助くる義捐金廣告

一點の詭謀なく一毫の表裏なく唯憫むべき女奴を救済するの目的を以て險を履み難を冒して盡力止まざるは救世軍娼妓救助の運動なり其深く社會の同情を得ること決して偶然に非ず然るに必要の費用給せずして往々運動に遺憾を感ずるとは同軍の實際を知る者の語る所仍て吾々發起者左の方法を立て之を江湖の義人に訴ふ血あり涙ある有志の士諸ふ一片の助を同軍に興へよ

發起者 江原素六 島田三郎  
根本正 安藤太郎

本文の義金は直接左の場所へ送附を乞ふ其報告は毎日新聞社に依頼し廣告を以て収

受の證に代ふ

新橋ステーション前

救世軍本營

是は毎日新聞に掲げられたる廣告文であり升。而して安藤太郎氏を其會頭とする、日本禁酒同盟會は、亦機關「國の光」に左の特別廣告を掲げ、集金人が會費を集めて歩

救世軍運動費義損廣告

時、特に戸毎から救世軍への義捐金を募集し。之を本營に送り届けられました。禁酒と廢娼の關係は恰かも車の兩輪に於るが如く相互援助の必要あるは固より辨を俟ざるなり、今や救世軍は正に全國の魔窟に向ふて進軍を開始す吾人禁酒會員が少くとも其彈藥供給の任に當るべきは必然の義務とす願くば有志の諸君多少に不拘義捐あらんことを

九月三十日

東京市京橋區西紺屋町廿番地

日本禁酒同盟會本部

地方會員にして運動費を義捐せらるゝ諸君は同盟本部へ御送金有之度候



"DONT GO TO THE YOSHIWARA"



且那吉原へ往り代りに救世軍に往て下る

箇人又は團體の名に由り、感謝狀を贈り、又は金を送りたる人々は多くあれ共、今一々之を掲げる暇がない。唯左に其一例として、神戸基督教婦人矯風會から参つたる手紙許を掲げませう。

天父祝福の下、貴軍益御壯榮斯道の爲め御奮勵相成候段奉大賀候、陳は貴軍御渡航以來種々の方面に於て我等同胞の爲め御盡力相成候義は、弊會に於ても兼て承及夙に一書を裁し謝意可申述筈の處今日迄遅延致居候段不本意至極に奉存候。將又我等同胞姉妹中に在りては從來一種の職業相營居候者有之彼等は畢竟昧無智にして人權の何物たるを辨不申、一時之窮狀に迫り不得已右様之情態に陷候義とは被存候共、本邦古來之習慣上彼等に在りては左程の耻辱とも不存視然今日迄打過居候段天父の榮光に對して恐懼不知所措次第に奉存候。然る處今回貴軍に於ては有らゆる手段方法を盡し彼等の爲め人權の貴重なる所以を御講明相成幾多の危険迫書を冒し可憐の姉妹を水火の苦境より御救助被成下候趣弊會一同感佩の至、謝辭の申上様も無御座候。是迄直接御拯救相成候は尙少數之事とは被存候共自今以後彼等職業



者は這般の實例に據り續々正業に復歸可致候。勿論新に邪道に陥り候者も、隨て跡を絶ち我邦の全土を擧げて純潔清明の天地と相成可申是皆貴軍先發の効果と奉存候。希くば天父貴軍の上に深厚なる祝福を垂れ玉ひて貴軍をして勇往邁進此事業を完結し、以て有終の美果を収めしめられんことを。蕪辭其意を難盡候得共謹で寸楮を以て謝意申述度如此に御座候敬具

明治三十三年十月 日

神戸基督教婦人矯風會

救世軍御中

去年八月より今年一月に至る、六ヶ月間に職業婦救済所に收容したる婦人の數は合計二十八人で、其出て參つたる地方は、洲崎六人、吉原五人、千葉四人、横濱二人、新宿二人、野州二人、上州二人、川崎一人、千住一人、戸塚一人、茨城一人、茨城一人、此上州と茨城からの三人だけは、娼妓ではなくて酌婦であり升。其落着先は親元に歸りたる者十一人、知人に引取られたる者六人、人に嫁したる者四人、遁亡二人、現在員五人であり升。勿論救世軍の手で職業をなし、直ちに親兄弟の處へ歸りたる者

は、此他に尙數十人あります。或時一人の娼妓を洲崎から救ひ出し、之を其郷里名古屋に送り還しますると、數日経て後に同地在留のモルフ氏から、左の如き書翰が參りました。

二三日前彼婦人は無事歸着致候。救世軍が非常に親切であつたこと、自分共が非常の好運に遇ひたること並に就き、様々の物語を致し、近隣の人々を驚かし候。近隣の人々は今の世に然る善良なる團躰あるやをいふかる程に候。福音の門はこゝにも開かれ候。

亦以て彼等親子親類、一室の中に相見たる當時の、歡喜を察するとが出来升。今尙數人の廢業娼妓の事を録し、此事業に同情を有する諸君の御參考に供へ度と思ふ。

今年二十三歳になる某女は、其十七歳の時、東京の或政治學校講義録發送掛の妻となりましたが、妊娠中に夫が放蕩を始め、家を外にして遊び歩くので、心配の餘りに流産し、其から未だ一月も経ぬ間に離縁になつて、親の處に歸りはしたものの、東京に居て先夫と顔を合はすことを厭ひ、寧ろ好い奉公口でもあれば、田舎に往たいと云ふ



て居る處を、狡猾なる口入屋が開き付、うまく口車に乗せて茨城縣へ醜婦に往込ませました。が、同人は其から二三ヶ所茶屋から茶屋へと住かへて、終に福島街道、小里と云ふ所へ流れ來て居る時、其東京に居る母親が悔改めて救世軍の兵士とあり、其事を小隊の受持士官に相談したので、救世軍に於ても棄て置くわけに參らず、特に士官を同地に遣はし、救濟して連歸へり、醜業婦救濟所に入れることとなつた。之が我醜業婦救濟所に收容したる最初の婦人であり升。同人は其後一先づ親元に歸り、今は小石川邊の或る堅氣赤家に奉公して居ます。

又一人の婦人は親の家を飛び出して上京し、北里の傳染病研究所の看護婦となつて居るうち、其所の若い醫者の妻となつて、兒まで設けましたが、其後夫が病氣で死んで、母子路頭に迷ふ有様となつて居る處を、或人が見て兒供は世話をしてやるから、身一つで勤奉公でも致し、相應に養育料を送つたが宜しからうと、忠告しました故、其氣になつたもの、然りとて別に思はしい口もない所から、終に身を賣て下總の銚子に參り、出稼娼妓を勤めることとなつた。然るに此度自由廢業のことが起つた故、



SALVATION ARMY RESCUE HOME, TOKYO

(東京在) 所濟救婦業醜軍世救



或日病院から飛び出して醜業婦救済所に参り、書面を以て廢業の手續を致して貰ひ、素人になつて今は東京市中に、正徑な世渡をして居ます。

今年二十八歳にある某女は、大坂、伏見、京都、大垣で娼妓を勤め、終に横濱に来て、こゝでも亦數年此厭ふべき職業を營んで居ましたが、今は早や自分にもつくづく浮た勤が嫌になり、何卒正業に就たいと思つて居る矢先へ、人から救世軍の話聞いた故、即ち本營へ頼つて参りましたが、本營に於ての人を附て横濱の壽町警察署に出頭させ、其廢業の手續をしてやりました。併し同人には無届で廓外に出たる罪がある故、廢業後三日間の拘留を命せられ、纏て自由の身になると、醜業婦救済所に引取られました。此婦人には堅氣な親類があつて、同人の浮氣稼業故に、暫らく義絶して居ましたが、之を聞いて喜んで訪ねて参り、後之を其家に引取ることゝなつた。此婦人は唯今然る男子の妻となつて居り、毎々救済所へも出入を致し升。

或ひは頭から鹽をかけられ、辛く救済所へ遁て参つたる者あり、或ひは細帯を二階の窓につなぎ、其にさがつて下へ降り、警察署へかけ付たる婦人があり升。二人の娼妓

は淺草警察署で名簿の削除を終へ、出て来る處を樓主に抑へられて、着て居る着物、穿て居る足袋まで脱がされ、古裕の上を細い紐で縛り、辻々で道を尋ね乍ら、二人手を引いて神田警察署迄参り、神田警察署から又救世軍を頼つて参りました。

醜業婦救済所に收容せられたる婦人にして、其後基督の救を受け、救世軍の兵士となつたる者が三人あり、尙其他にも目下數名の入隊志願者があり升。今其兵士の一人にして、近縣の然る男子に嫁いて居る婦人の、手紙を御覽に入れませう。

れくれしながら御れかたぐ御わび申上候扱どやおいゝ寒ささびしくあいな候  
 どころ皆々さまには御かはりもなく無事にて御くらしなされ候か一寸御たづね申  
 上候又私事も無事にてくらしおり候へば憚ながら御あんしん下され候又私事  
 は日々しんぞ(信仰)にすゝみ候へば御あんしんくだされ候又一寸御ねがへ申上候  
 まことに御てすながら一月のあつまりにはせひとも一途まいりたく候ゆへあつまり  
 のどきには一寸御しらせくだされ候又〇〇と二人にてせしよ(聖書)をみてはまこと  
 にかんしんしていただきますも、とらたむからなまこところなありますゆへをれや



これやいろ／＼なるさうたき事もこれあり候へばせひともあつまりのどきには御し  
らせくだされ候又いろ／＼申上たき事これあり候へともおもうようにふでもまはら  
ず候へばいすれ御めもじのせつくはしく御はなし申上候皆々様によろしく申下され  
候ますは御寒さはげしく候ゆへ御み御たいせつになさるよお御ねがへ申上候まづは  
御わびかた／＼御れまであら／＼し

十二月十七日

此くして其夫と一緒に益々信仰に進むのみならず、救世軍の一兵士として其義務を盡  
さん爲め、正月になつてからは、又其月々の彈藥金を拂ふとを申込んで参りました。  
即ち左の如し

新年の御ことぶきめ出たくゆはいまいらせ候扱とやさくねんちゆうはいろ／＼御せ  
はさまにあづかりありがたくやま／＼御れ申上候又今年もあいかわらす御つさやい  
のはどねがへ申上候又十二月三十日出の御てがみたしかにうけとり候へば御あんし  
ん下さるべく候又まことにれそれいりますが一寸御たづね申上候私事は十二月よ

り月々にたくさんなる事もできかね候へとも三十銭すつでもおくりたく候へともあ  
なたさまにおくりてよいか又ほん之(本營)におくりてよいかはかりませんゆへこの  
いんしをまことにすみませんがさふしとなくだされ候これは十二月分なれども一  
月までおくれしたんはいくえにも御ゆるしくだされ候一月ぶんはいすれあどよりお  
くりますいろ／＼申上たきことこれあり候へともいづれちか／＼の内に御めにか、  
りくはしく御はなし申上候(下略)

此婦人は又自分か今日此る幸福な身とあつて居るに付、他の娼妓のことが氣の毒で堪ら  
ず、何卒然う云ふ境遇から救はれて、正業に復する者が多く起る様にと、且暮神様に  
祈つて居ましたが、先頃圖らぬとから以前自分の勤めて居た家より、又もや二人の廢  
業をする婦人が現はれ、どちらも救世軍の醜業婦救済所へ引取るゝことなつたので、  
益々喜んで神様に事へて居ります。



今や世界各國いつくの海洋にも、救世軍人に乗せたる軍艦、又は商船の、往來をして居る所はない。其故一つには此等の救世軍人の爲め、又一つには一般の水夫商人が、長らく航海したるあつて、偶々上陸すると云ふ際に、傍から其靈魂上の保護をする必要のある處から、救世軍は世界の重なる港に、水夫及び商人館と云ふものを開き、我日本に於ても今から四年許前に、早くも之を横濱に設けたる次第であり升。  
 水夫館は横濱の山下町と云て、もと居留地であつたる町にあり升。天井が高くして明るく、大部屋があつて、六十人を宿らることが出来ます。食堂あり、讀書室あり、湯殿あり、其他一通り何でも揃ふたる、氣持の好い場所であり升。之を受持つ士官は大校エリス夫婦で、殊に大校は最もよく此事業に熟練し、巧みに事務を行ふのみならず、機さへあれば赤熱的の救靈會を營み、罪人をして悔改めて天父に歸らすることを勉めて居ます。時としては水夫等が上着の裏に、シン(酒の名)の罐など入て歸り、竊

STAFF-CAPT. AND MRS. ELLIS



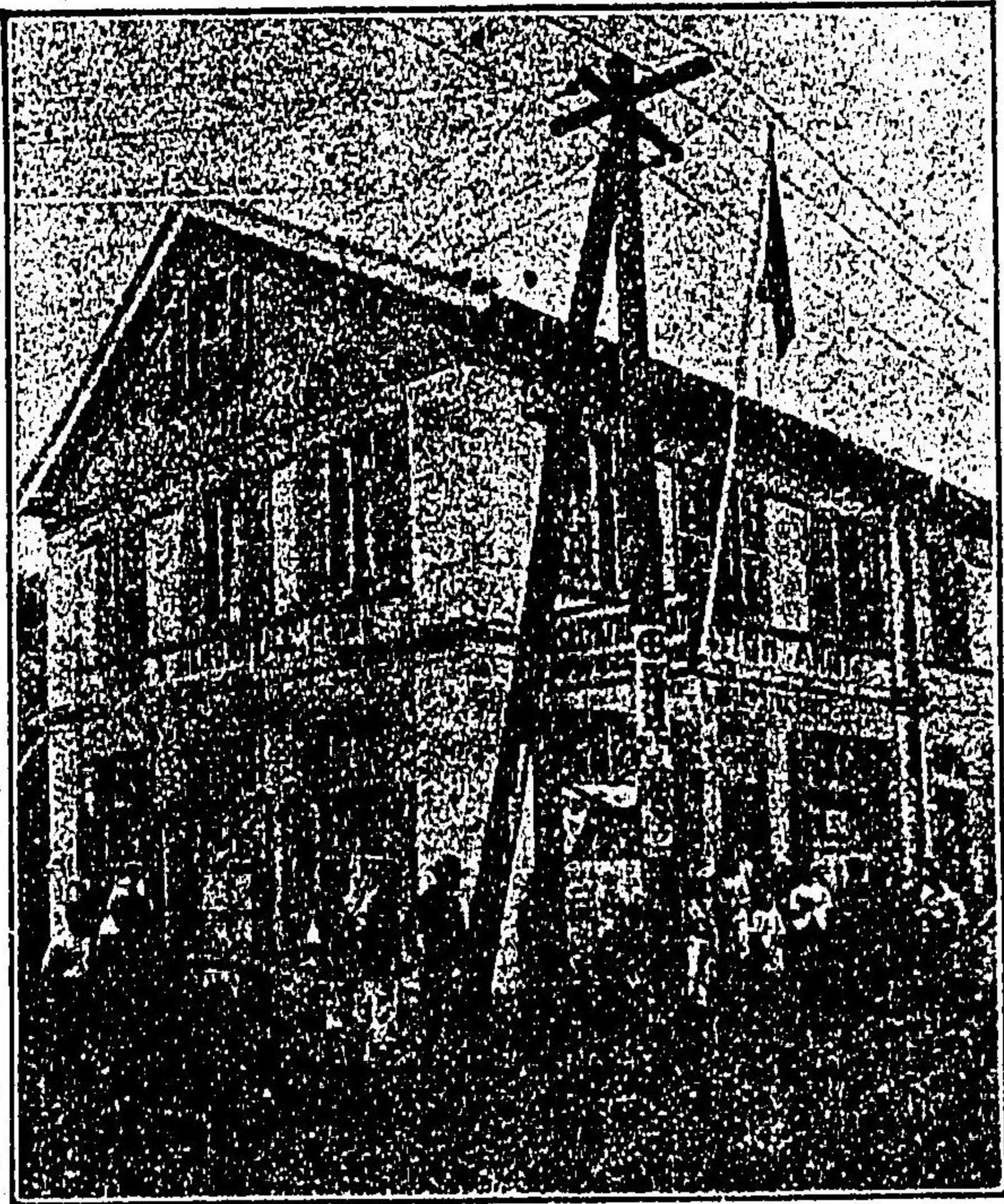
水夫大校夫人



に部屋へ持て行かんとすると、大校は直ぐに見付て之を取上げ、「おつこい其れは水夫館の規則に違ふ。此方へ寄しなされど、角の立ぬ様に異見をする所など、仲々熱れたものでムリ升。

エリス夫人は愛と同情の化身で、来る人毎に之を「ね母さん」と呼んで慕ふて居ます。水夫館の定つた仕事の外に、水夫等がた傷を洗て呉れどか、又は怪我をしたから糊帶をして呉れるやと云ふ望みに至る迄、一々相手になつて世話をしてやり升。其親切が何れ丈水夫や商人の心に感じて居るか

SAILORS HOME, YOKOHAMA



(横 濱 在) 館 夫 水

親に手紙を書て呉れどか、許嫁に手紙を書て呉れなど云ふ頼みより、ヤレ齒が痛むから療治をして呉れどか、喧嘩をし

は、毎日諸方から来る澤山の禮手紙に由ても、之を察することが出来ます。

諸君が若し一二艘の外國軍艦の、横濱に碇泊中、我水夫館を覗きますならば、其こそ所狭き迄に水夫等がつめかけて、食物の支度万端、其はそれは目の廻る様な騒をして居ることを御覽になりませう。大校は又船から遁げて、横濱に流浪する者の爲に、他の口を見付て之を船に乗せてやり升。横濱の水夫館に因て其靈魂の更生りたる者、又は信仰上に益を得たる人々は、世界の到る處に之を見出すことが出来ます。今こゝに唯一つ丈何時ぞや水夫館で起りたる、感すべき事實をお話し申しませう。

A 某と云ふは意志が薄弱で、又大變に酒好の男でありましたが、乗込むべき船がない爲め、横濱市中を流浪して居る所を、大校は引取て暫く食物をわてがひ、其間に或る船長に頼み、仕事の周旋をしてやると、某は出帆前になつて急に姿を隠し、船の出た後で近所の居酒屋から出て参りました。然るに大校は忍んで之を水夫館に連れ歸り、食物を與へて尙も暫らく到留させて置き、再び他の船に周旋してやりましたが、此度も亦同人は何處へか身を隠して船へは乗らなかつた。最後に大校は今一度辛抱して之

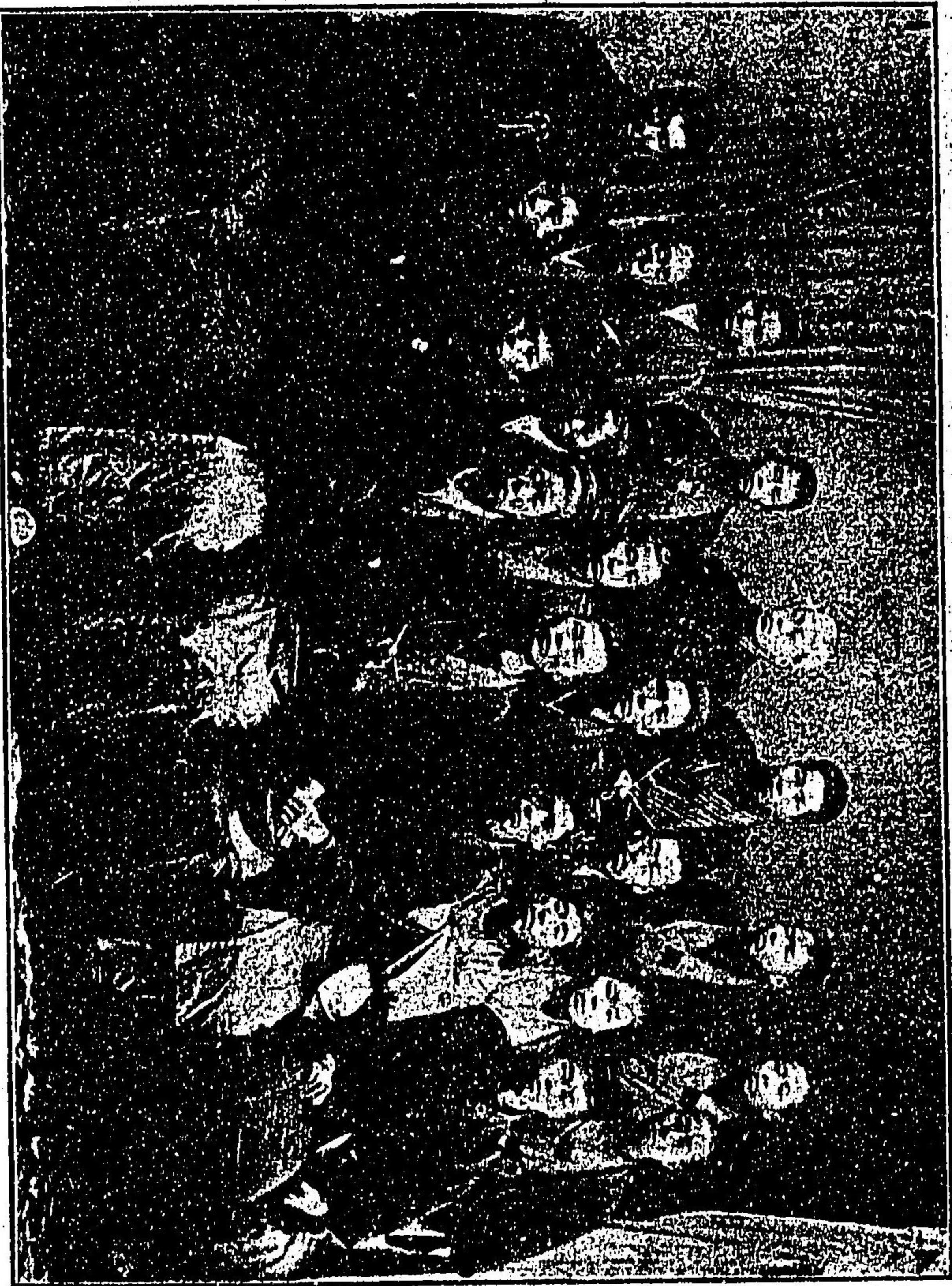


が世話を致し、新しい仕事を見付けて、愈々明日は船に乗せて出してやること云ふ前の晩、某は水夫館内の集會に出席して、甚く前非を後悔し、基督の救を受け、全く新しい人間となり、翌日は船に乗込で其職業に就たる許か、以來一滴の酒をも飲まず、追々立身して今は或漁船會社の役員となり、可なり好位地に登つて居ます。

### 第十二章 闘争及び出版物

救世軍は印刷物を用ひて、神様の御榮を揚げ、人の靈魂を救ふことを勉めて居る。救世軍がどこの國でも、必らず發行するのは闘争と云ふ新聞で、我日本に於ても其開戦後間もなく之を發行致して居ます。闘争の部数は段々に殖て、昨年の正月には三千五百六十部宛であつたが、此正月には八千三百部宛發行することとなり、其新年號の如きは一萬五千八百部刷つても、未だ足りない程であつた。最初之を發行したる時より、追々改良を加へ、其大さに於ても今は第一號の三層倍に當つて居ます。近來は又材料を精撰し、寫眞版、木版等を扱ひこととなり、宗教社會の新聞としての、上乘と見なさ

CADETS IN TRAINING



救世軍の士官候補生



る、様になつた。  
 去年八月一日に発行したる醜業婦救済號の関聲には、「女郎衆に寄る文」「天の使の聲」など云ふ文章があつて、之を諸方の遊廓に賣たる結果は、日本全國の輿論が一時に沸騰するに至り、現に下総の銚子では、唯此號の関聲が一枚丈、何うかして病院に入り込んだる爲に、十五人の娼妓が之を讀んで廢業したと云ふ程であります。  
 昨年十月迄は出版條例に由て之を發行しましたが、十一月からは保證金を納め、新聞條例に由ることゝなつた故、以來は遠慮なく其時々の問題や、又は救世軍の戦報等を掲げらるゝことゝなつた。関聲の記者は山室中校で、其目的は之に由て充分に救世軍を代表し、其主義、精神、運動を紹介し、殊に耶穌基督が人を救ひ、靈が人を潔め給ふことを、道理の上、又事實の上から証明して、最も大なる精神上の祝福を、其讀者の上に願はんことと云ふり升。

関聲は今日迄に既に多くの人々の益となりました。太田大尉の如きは其初途中で一枚の関聲を買ひ、之を讀んで感ずる所あり、軍營に訪ねて來て悔改め、兵士となり後士官となつゝる者であり升。水口大尉の母は又基督を信すべきか否やと、迷ふて居る最中に、関聲を讀んで感心し、斷然其好酒と煙草をやめ、心から基督に従ふ覺悟になりました。或人が此老女に向ひ、「もう先も短かいのに今更然んな堅苦しいことを、始めぬでも可いではありませぬかと云ふと、老女は答へて「否々先が短かいから、尙眞面目な世渡をせねばなりませぬと申されました。備中倉敷の或れ茶屋の娘は、親子相談の上不日妾に往く筈にあつて居ましたが、圖らずお客が置て往たる一枚の関聲を讀み、斷然之を思ひ止りました故、父親は驚いて色々に説きとせ共、一向之を聽容れませぬ。果は父親もあぐみ果て「何うも若い娘が、好い容姿をすることを何でも思はぬ様になつては仕方がない」と云ふたさうです。此娘は後に近村の堅氣な家へ嫁に參りました。又上州の伊藤某と云ふ人は、或る教會の會員ながら、穀屋と共に煙草屋を營業して居ましたが、或る時伊勢崎小隊の一兵士から、一枚の関聲を送られ、之を讀んで自分の信仰の不眞實なることを悔改め、斷然決心して以來煙草を賣ることを廢め、唯穀屋の方許り營むことゝなりました。此他関聲を讀んで悔改めたる人、救はれて兵士とあり



たる人、放蕩を止めたる人、酒を止めたる人、信仰を復興せられたる人々や、随分  
 澤山ござり升。多くの傳道者は其教會の信者に勸めて闘争を讀せ、又は求道者を導く  
 爲に之を用ひ、或教會では又其日曜學校の生徒に之を賣らせて居り升。  
 今年新年號の闘争は、取分け餘計に發行し、一同其賣捌方にも元氣を出しましたが、  
 最も多く賣りたる人々は左の如し。

- |        |     |       |
|--------|-----|-------|
| 千七百部   | 八王子 | 高野中尉  |
| 千二百十四部 | 横濱  | 中村大尉  |
| 千四百十部  | 牛込  | 櫻井中尉  |
| 千部     | 大坂  | 小合橋治氏 |

此小合氏は單獨で毎號五百部宛の闘争を、大坂の市中に賣て居り升。又布哇の日本移  
 住民の中にも、我闘争を讀む者が七八百人あり升。

書物を出版することは他の仕事に追はれて、稍手後になつて居ますが、今から充分  
 此方にも身を入れる筈である。山室中校が著はしたる平民之福音は、一年餘の間に四

千部賣れましたが、之に因て靈魂上に祝福を受たる人々が甚だ多い。先達でも一人の  
 若い人が、自由職業云々の用向で、芝口の本營に参りますと、其處で自分の靈魂の  
 上の注意を與へられ、歸宅の節は一冊の平民之福音を手に入れて歸りましたが、之を  
 讀で自分の罪惡を悔改め、今は救世軍に加はり、其徽章を着けて大膽に信仰を告白し、  
 先日半日に百部程の闘争を賣たと云ひます。此書物が出版にあつて間もなく、或る  
 休職海軍大尉は、其妻に讀す積  
 で一冊買求め、自分が先づ之を  
 讀んで悔改め、時は正月の初  
 で、最もよくカルタの賣れる時  
 節であるにも拘らず、其妻君が  
 内職に商ふ品物の中から、カル  
 タ丈は取除かせ、其悔改の實  
 を示しました。其後妻君の方も

LIEUT. KONO



高野中尉



基督の救を受け、之に救世軍人の家庭を營む様になられたことがある。又今玉島に居る岡田中尉は、以前横濱に居た時、或る教會の人から平民之福音一部を借て之を讀み、其から救世軍に来て救はれ、兵士となり、候補生となり、終に今日は士官の一人として働いて居ます。我輩は神様が此一冊の書物を祝福し、重ね々其御榮の爲に用ひ給ふことを感謝せねばならぬ。

救世軍は又娼妓廢業の事に關する小冊子、及び救世軍人に讀す爲め小冊子を發行致しました。今年はもつと出版物に力を盡し、「十錢文庫」と云ふ平易なる書物を出したい積である。又近ひ間に新しい軍歌、及び大將が著はされたる「救世軍兵士の命令及び規律」と云ふ書物をも、翻譯して出版する心組であり升。此事の印刷物に由り、耶穌基督の救靈的、進撃的の宗教が、一層我日本の國に紹介せられんことを望む。

第十三章 救世軍の賛助員

救世軍以外の人々にして、特に救世軍に同情を寄せ、年々拾圓以上の金を投じて、之

を助くる人々を賛助員と云ひ升。其規則は後に掲げて置ますから、就て御覽下されよ。昨年正月には賛助員の數が、僅かに四人でふりましたが、其暮には九十六人と註せらるゝに至つたことは、我輩の喜ぶ所であり升。ハツチャ中校は此部の書記として東西に奔走し、到る處多くの人々の同情を受けて居ます。今好機會である故、こゝから凡ての賛助員及び同情者諸君に、平生の御厚意をお禮申

ADJ. HATCHER



校中ヤチツハ

し升。

救世軍賛助員部規則

一 賛助員とは救世軍の目的を賛成する友人にして其薄命者、犯罪人を救ふ爲に營

む社會事業、又は基督の王國を擴むる爲に盡す傳道事業に對し、一定の補助を與ふる人を云ふ。賛助員は必らずしも救世軍の凡ての運動方法に同意することを要せず。







明治三十三年の克己献金

千五百八十圓

即ち昨年は一昨年の三倍以上献金があつたわけです。今年も年末に之を守らるゝ筈で  
ムる。

今一つ救世軍が毎年一度守ること「感謝祭及び社會年會」である。之は出獄人救  
濟所、醜業婦救濟所等の社會事業部の爲に、一年一回特別に集金をする時期であり  
升。今年は四月の始に之を守る見込ですが、何れ精しいとは其頃の閑弊に掲げませう。

第十五章 救世軍成功の秘訣

救世軍が短かい歲月の間に、非常に大奮闘とあり、盛んに神様の御業を行ふて居る  
とを知る人々は、皆一様に尋ねて曰ふ、抑々救世軍が成功の秘訣は何であるか。此  
問題に就て米國有名の説教者ジョシユア、ストロングと云ふ人の説が、甚だ面白い故、  
今其大意を譯して此書物の結論に代へ度と思ふ。

十九世紀末の四半期に於て、世界の宗教界に最も目醒しい出来事は何かと問ば、云

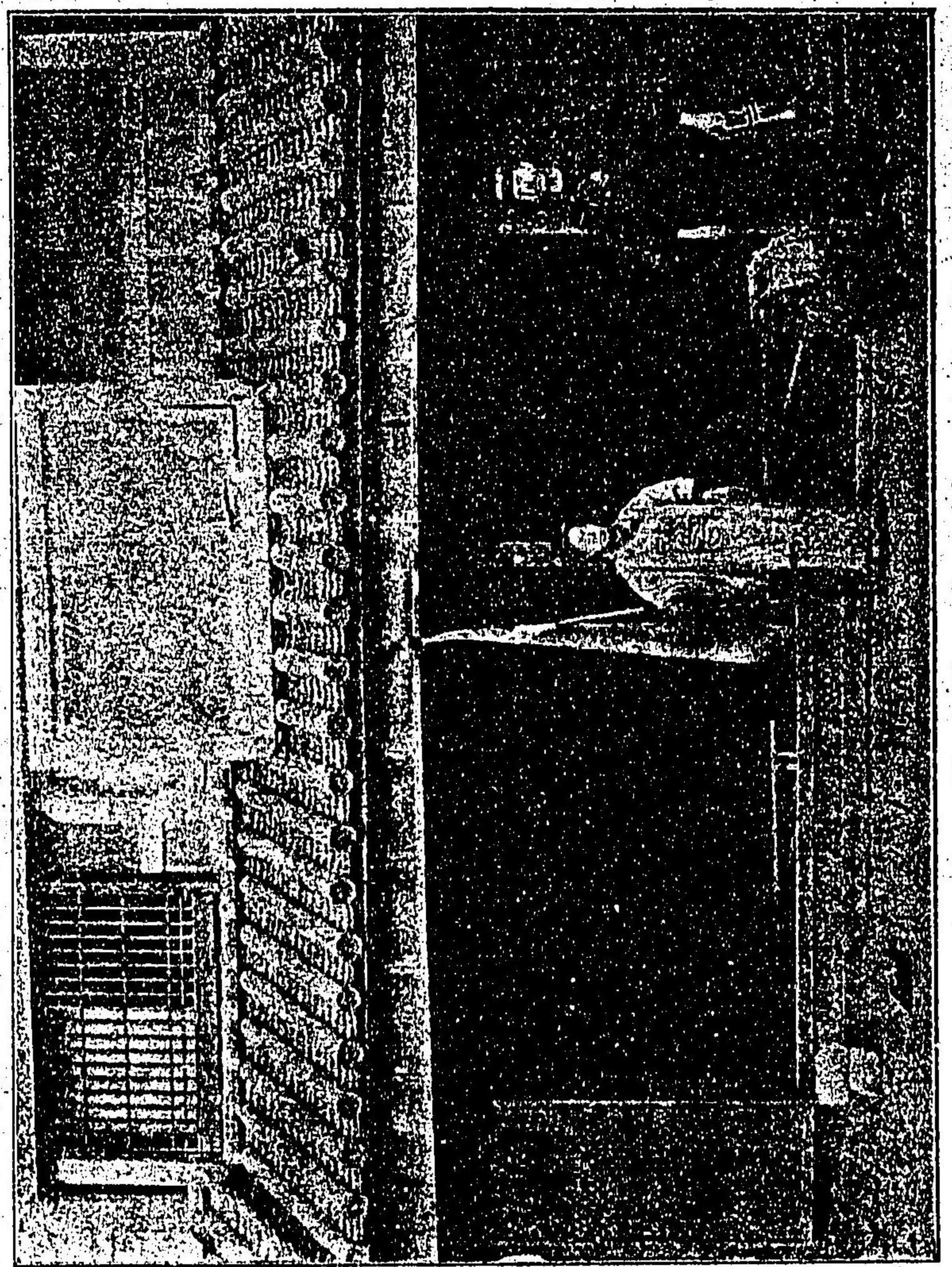
ふ迄もなく救世軍の勃興であると答へませう。救世軍は其初倫敦の貧民街にて起さ  
れ下層の人民を集めて組織せられ、昔の十二使徒程貧しい者の團練であつたが、忽  
ちの間に全世界に亘る大事業となりました。今や新西蘭より一轉して桑港に  
到り、ケープ、タウンよりノルドコピングに到る間、何處如何なる國々にも、其手  
を着けぬ所はない程に膨脹致しました。此る救世軍の大成功に付、同軍の或る有力  
ある士官は、其原因を尋ねて、第一創業者の天才と神々しき品性、第二其教ふる所  
が福音の大真理なること、第三創業者の夫人及び子女が、揃ひも揃ふて貴き働を  
軍隊になしたること、第四賢き方法を用ひたる事、第五此運動が神様に因て起され  
たる事にありと申しました。余が思ふに此等は皆救世軍成功の原因に相違ない。然  
り乍ら唯此丈が其原因で、他にはないと思ふ人があらば、其は充分な議論では  
まずまい。何故かと云ふに他の教會の中にも、随分之と似た様な性質を備へ乍ら、  
一向救世軍の如き成功をしないものがあるからでる。果して然らば救世軍の大  
る成功の原因は何であるか。



第一、救世軍は凡て其爲す所に於て進撃的であり升。教會は鐘を鳴らし、戸を開いて言ふ「誰でも来て随意に御聴聞されよ」と。然り乍ら基督は「往て救へよ」と御命令になつて居ます。救世軍はじつとして、人の來るのを待て居るものでない。大將ブーアの語に「神様の御助を別物として、若し人間の方面から、救世軍成効の土臺を吟味すれば、其は人々を福音の感化に沐浴せしむる爲に、直ちに之を進撃する點にあり升。救世軍の士官は莊嚴なる演壇の上に立つて、しかつめらしく當今の世態人情を論じ、彼等が何等かの不思議なる導に因り、自ら來て救はるゝことを望む、穩氣な人物でなく、却つて衢に出で、家から家、部屋から部屋へと訪ねて廻り、靈魂上の病人に近き手を其上に按て、彼等を大能の醫癒者に導く者であり升云々。救世軍は此くして毎年三百万戸を訪問して居ると云ふことである。

第二、救世軍は多數人民の間に住み、其風に同化し、其嗜好に適合して働き升。救世軍は其相手にする人々の言語、音楽を用ひ、其思想に伴ふて働き、古へのパツロと同様「凡ての人には凡ての人の如くなつて戦争して居ます。

第十五章 救世軍成効の秘訣



OKAYAMA BARRACKS



第三、救世軍は此の高尙なる精神を以て、人の靈魂を救ふことを勉めると同時に、亦人は肉體を有た者だと云ふことを記憶して働かす。思ふに數百年來諸教會が説く所は、肉體に包まれて居ない、靈魂丈を救ふ福音である。救世軍の大將ブースは、最も熱心に靈魂を救ふ爲に戦争する人物であると共に、亦其靈魂が肉體に包まれ、肉體に感化せらるゝものだと云ふことを憶へて、之を救ふ爲に働く者であり升。

第四、既に肉體の靈魂に及ばず感化を認むる者は亦其境遇が人間に及ばず影響を察し升。人を救済するには、容易にして自然なる法は、之を其境遇から救ふことである。之は教會が不案内にして、特に救世軍の得意とする所であり升。

普通の宗教家は、此兩方面に眼を配ることをしきい。偶々眼を配る時は、其人が宗教家たることを止めて、慈善家になつて終ふた時であり升。然り乍ら大將ブースは、慈善家たるが爲に宗教家たることを止る人物でない。大將に於ては宗教と、慈善は、譬へば靈魂の肉體に於る如く、相一致して違はないものであり升。救世軍の宗教は慈善的である。而して其慈善は宗教的であり升。救世軍は此點に於て、教會が隔離

したる二つのものを結び付ました。而して是は基督が靈魂を救ひ、併せて肉體を癒し給ふたる聖旨に合ふものであり升。

救世軍戦争記 終



●青年諸君に告ぐ

男女の青年諸君、諸君の中に此書物を讀み、神様が如何に救世軍を起し、又導き用ひてれ出なさるかを考へる時、忽ち其胸の中に靜かにして涼しさ餘があり、「往け、汝も亦往て身を献げて救世軍の士官となり、神様の御榮と人の救の爲に戦へよ」と命令することを覺ゆる人はありませぬか。  
固より之は貧窮困苦の途である。仙人の如く生活して馬車馬の如く働く生涯である。一言に云はば十字架を負ふて、耶穌の足跡を辿る生涯であり升。然り乍ら之は救主を始め、預言者も、使徒も、殉教者も、改革者も、皆一度は通行したる道路ではありませぬか。サボナローラが曰ふ戦争なくば勝利なく、勝利なくば冠冕なしと。我輩は義の冕を得ん爲に勝ち、勝んが爲に救世の軍を戦はねばなりませぬ。  
よく救はれて居る、身軀壯健なる青年男女にして身命を擲つて神の軍隊の士官となり、靈魂を救ふ爲に戦争し度と思ふ人々は、救世軍本營ブレード大佐へ宛て、其士官候補生の申込をなされ。

明治卅四年二月廿七日印刷  
明治卅四年二月廿八日發行

定價金十錢

- 編輯兼發行人 東京市芝區芝口二丁目三番地
- 印刷人 横濱市太田町五丁目八十七番地
- 發行所 東京市芝區芝口二丁目三番地
- 印刷所 横濱市山下町八十一番地
- 賣捌所 東京市京橋區銀坐四丁目二番地
- 全 東京市京橋區采女町二十四番地
- 全 大坂市新町通四丁目首六番地
- 全 神戶市元町一丁目
- 福音社 東京市京橋區采女町二十四番地
- 福音社 大坂市新町通四丁目首六番地
- 福音館 神戶市元町一丁目

其他救世軍の各小隊にて賣捌されます



●救世軍案内記

日本全国の救世軍を統轄する所を日本々營と申し、是は東京に置いてあり升。今左に本營及び各小隊の所在をお知らせ申しませう

○救世軍日本々營 (東京市芝區芝口二丁目三番地)

- 東京第一小隊 (東京京橋區入舟町三丁目)
- 東京第二小隊 (東京牛込區改代町)
- 東京第三小隊 (東京本郷區元町二丁目)
- 東京第四小隊 (東京神田區三崎町一丁目)
- 横濱小隊 (横濱市壽町三丁目)
- 横須賀小隊 (相州横須賀町)
- 八王子小隊 (武州八王子八日町)
- 岡山小隊 (備前岡山野田屋町)

○玉島小隊 (備中玉島本町)

○笠岡小隊 (備中笠岡町)

○高松小隊 (讃岐國高松)

○伊勢崎小隊 (上州伊勢崎町)

○熊谷小隊 (武州熊谷竹町)

○足利小隊 (野州足利町)

別に社會事業部の所在は左の如し

○出獄人救濟所 (東京神田區三崎町三丁目)

○醜業婦救濟所 (此事務は本營にて扱ふ)

○水夫館 (横濱山下町百廿三番)

此等の場所には皆其々士官が働いて居ること故、尋ねて往て話をお聞きされ。銘々身に應はしし神様の御恵を御受なさる様、御勵め申します。



●救世軍出版物廣告

●このころ

毎月二回発行 一部代價金一錢郵税五厘  
一ヶ年分郵税共金三十六錢

●是は救世軍の機關新聞です 繪入總振假名平易で廉價で最も有益ります

山室軍平著

定價金二十錢郵税四錢

●平民之福音

●是は基督教の鳩翁道話と稱へらるゝ書物です 何人も是非お讀なされ

ユー、ジー、モルフ氏著

一部代價金五厘郵税二十部迄金二錢

●死地に行く勿れ

●是は遊女狂の愚かにして罪深いことを述べ道樂者を戒めた小冊子です

ユー、ジー、モルフ氏著

一部代價金五厘郵税二十部迄金二錢

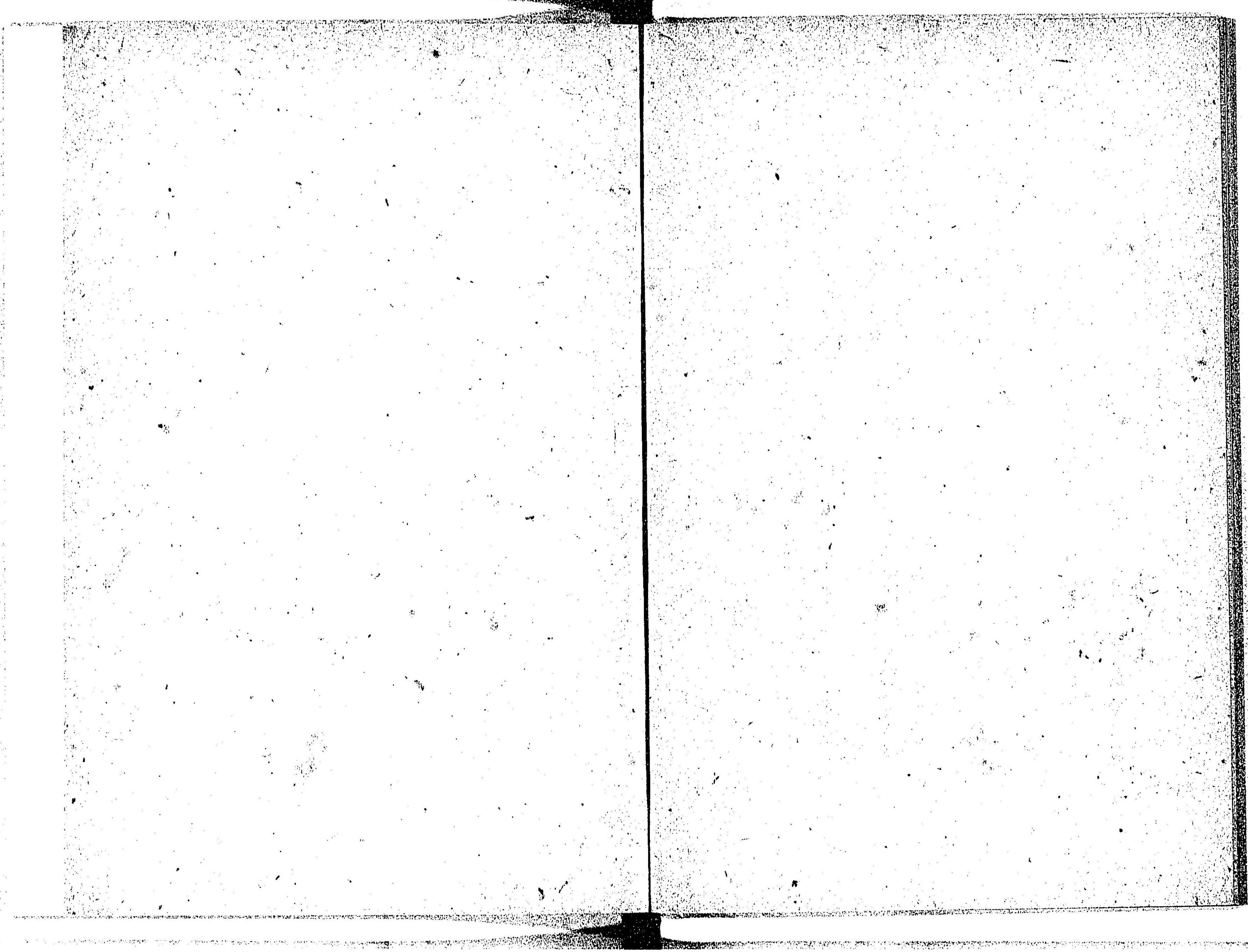
●娼妓に與ふる文

●是は娼妓に自由廢業の手續を教へ廢業した後の心得を説示したものです

東京芝區芝口二丁目三番地

救世軍日本々營

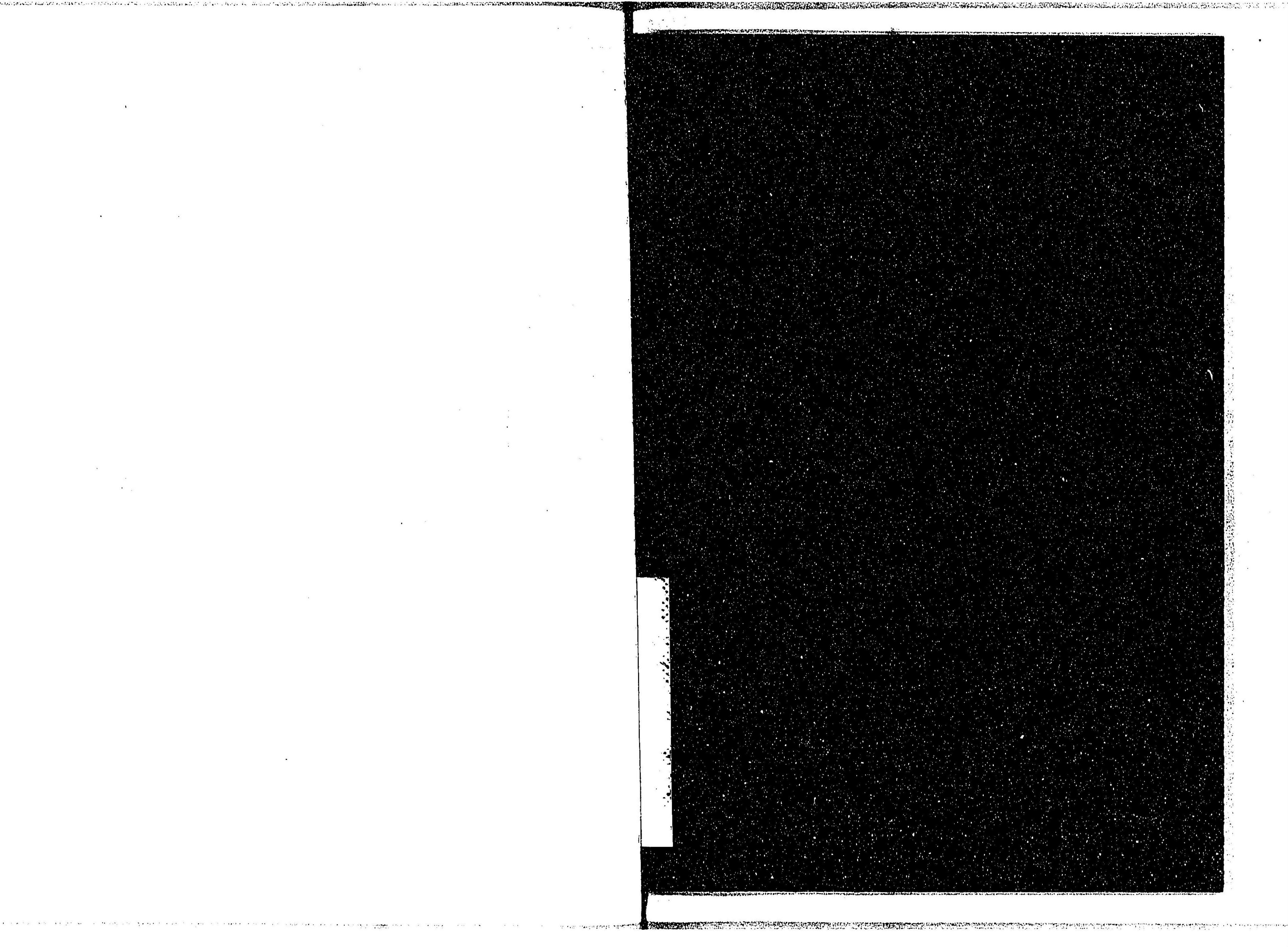














特 18

503

救世軍戦争記

国立国会図書館

020374-000-6

特18-503

救世軍戦争記

ヘンリー・ブロード/編

M34

ABI-0181

